

HAKA TA
博 多 VIII

—博多遺跡群第29次調査の概要—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集

1987

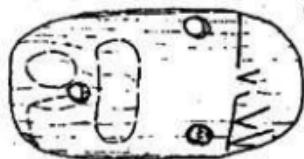
福岡市教育委員会

博多 VIII 正誤表

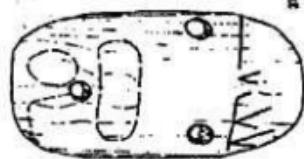
頁	行	誤	正
48			
59	1	8、まとめ	IV、まとめ
59	25	後、(1期工事)入江の	後(1期工事)、入江の



249



250



HAKA TA
博 多 VIII

一博多遺跡群第29次調査の概要一
福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集



1987

遺跡調査番号 8509
遺跡略号 HKT29

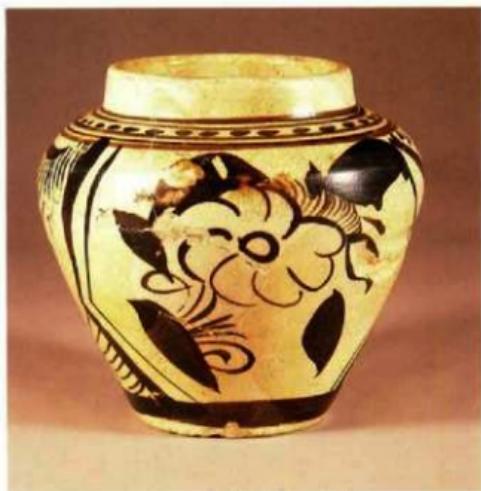
福岡市教育委員会



埋立造構



元樣式青花小碗 601



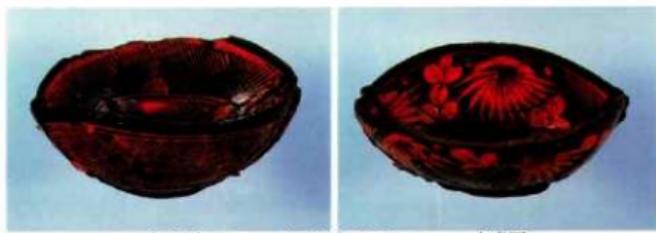
白地鐵繪壺 317



内面

3層出土漆器椀 366

外面



左半面

3層出土漆器椀 367

右半面

序

現在福岡都市圏の窓口として市街地の再開発著しい旧博多区は、古代から中世にかけて对外貿易的一大拠点として歴史の舞台に登場した地域でもありました。

本書は昭和60年度に行なった民間開発にかかわる第29次調査の概要を収録したものであります。

今回の調査では、日宋貿易に意欲を燃やす平清盛によって開削され、以降、古歌にもたびたび詠みこまれた「袖の湊」の実像に迫る資料の一端を垣間見ることができ、古代から中世にかけての国際商業都市「博多」を研究する上での大変な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術研究の場で活用されることを切に願っております。

調査に際し御協力御指導を賜わりました方々に心より感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が1985年度に実施した博多遺跡群第29次調査の概要である。
2. 調査は山崎龍雄、常松幹雄、加藤良彦が担当した。
3. 本書に掲載した遺構番号のSE、SKはそれぞれ、井戸、土壌の略号である。
4. 本書に掲載した遺物番号の3桁目の数字はそれぞれ0=遺構内、1=包含層1層、2=包含層2層、3=包含層3層、6=包含層6層、7=包含層7層、8=擾乱層と、その出土層位を示している。
5. 調査区内グリッド名称は方眼線の西交点とした。
6. 本書で用いる方位は真北とした。
7. 本書で用いる貿易陶磁分類は「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊 1984年）に拠った。
8. 本書に掲載した遺構実測図は、山崎、常松、加藤のほか、大内土郎（現今宿公民館々長）、中村昇平（現春日市教育委員会）、磯崎忍（明治大学学生）、広松秀子・横井久雄（以上熊本大学学生）、久保真一、渋田幸信による。
9. 遺物実測図は、常松、加藤のほか、平川敬二（九州大学研究生）、池田裕司（九州大学学生）、荻村昇二（明治大学学生）、永瀬昭子（熊本大学卒）による。
10. 本書に掲載した写真は常松、加藤、平川、白石公高、中登志之（博物館準備室嘱託）による。
11. 本書の執筆はI-1、2を山崎が、II-1と6-(1)-④⑤、III、Summaryを常松が、他を加藤が行ない、編集は常松の協力を得て加藤が行なった。
12. 付論の出土船材の樹種の鑑定は九州大学木材理学教室院生・長尾博文氏・渡辺洋徳氏・古賀信也氏にお願いした。

本文目次

I. 調査に到る経緯	1
II. 調査の概要	5
III. 調査区出土の船材及び杭打船について開書	52
IV. まとめ	59
付論 博多道路群第29次調査出土船材調査報告	61

挿図目次

図1 発掘調査風景	3
図2 延長御城絆輪図	6
図3 博多古図	7
図4 博多遺跡群調査区位置図 (1 : 10,000)	8
図5 博多遺跡群第29次調査区位置図 (1 : 1,000)	9
図6 調査区上面遺構全体図・上層断面図 (1 : 100)	11
図7 調査区上面遺構全景	12
図8 調査区上面遺構全景	12
図9 SK1・2号土壤 (1 : 30)	13
図10 SK1・2号土壤	14
図11 SK2号土壤	14
図12 SK1・2号土壤出土遺物 (1 : 3)	15
図13 SK3号土壤 (1 : 30)	16
図14 SK3号土壤	16
図15 SK3号土壤出土遺物 (1 : 3)	17
図16 SK4号土壤	17
図17 SK4号土壤断面	17
図18 SK4号土壤 (1 : 30)	18
図19 SK4号土壤断面 (1 : 30)	18
図20 SK4号土壤出土遺物 (1 : 3)	19
図21 SE1・2号井戸	20
図22 SE1・2号井戸 (1 : 30)	20
図23 SE1号井戸出土遺物 (1 : 3)	21
図24 SE4号井戸 (1 : 30)	21
図25 SE4号井戸	21
図26 SE5号井戸 (1 : 30)	22
図27 SE5号井戸	22
図28 竹杭列 (1 : 50)	22
図29 調査区下面遺構全体図・断面見通し図 (1 : 70)	24
図30 調査区下面遺構全景	25
図31 調査区下面遺構全景	25
図32 B列・X列横板	26
図33 5列土留板と石垣	27
図34 5列土留板と石垣 (1 : 50)	27
図35 B列土留板	27

図36	B列上留板（1：50）	27
図37	B列・X列土留板	28
図38	X列上留板	29
図39	X列土留板	29
図40	X列土留板	30
図41	X列施梁出土状況	30
図42	X列土留板（1：50）	30
図43	V列竹杭列	31
図44	溝状遺構	31
図45	溝状遺構土層	31
図46	竹杭列・溝状遺構（1：50）	32
図47	1層出土遺物（1：3）	33
図48	2層出土遺物(1)（1：3）	34
図49	2層出土遺物(2)（1：3）	35
図50	2層出土遺物(3)（1：3 241・242のみ1:4.5）	36
図51	3層出土遺物(1)（1：3）	37
図52	元様式青花・鉄輪	37
図53	3層出土遺物(2)（1：3）	38
図54	3層出土遺物(3)（1：3）	39
図55	3層出土遺物(4)（1：3）	40
図56	3層出土遺物(5)（1：3）	41
図57	3層出土遺物(6)（1：3）	42
図58	6層出土遺物(1)（1：3）	43
図59	6層出土遺物(2)（1：3）	44
図60	泥人及び擾乱層出土遺物（1：3）	46
図61	木器(1)（1：4）	47
図62	木器(2)（1：4）	48
図63	軒丸・軒平瓦（1：4）	49
図64	舟材転用杭（1：30）	50
図65	X列横板No 2（1：30）	51
図66	B列横板No 2（1：30）	51
図67	和船部分名称	52
図68	木挽鋸	54
図69	各種釘差しノミ	54
図70	各種船釘	55
図71	杭打船	56
図72	杭抜船	56
図73	包含層内接合遺物分布模式図	59
図74	日本形構造船の推移	60
図75	鍔釘を使ったはぎ合せ法	60
図76	船材頭微鏡写真(1)	62
図77	船材頭微鏡写真(2)	63
図78	船材頭微鏡写真(3)	64
図79	船材頭微鏡写真(4)	65

— I . 調査に到る経緯 —



船板搬出風景

1. 調査に至る経過

福岡市の旧博多地区は古来より大陸の先進文化の受入口として栄えて来た地域であり、したがって数多くの歴史的文化遺産が残され、学界からも注目されて来た地城である。福岡市教育委員会ではこの旧博多地区の、南は国鉄博多駅から北は奈良屋町付近迄、西は那珂川、東は御笠川迄の範囲を博多遺跡群と名称し、さまざまな開発工事に対して事前に発掘調査を行って来ている。昭和61年度現在民間開発関係で第29次調査を数える。

今回の調査は昭和59年8月10日、東京海上火災保険株式会社から、博多区冷泉町1番1号地内におけるビル建設の申請が教育委員会文化課に提出された事から始まる。受付番号は福岡市教文59-10-76である。文化課では当該地が博多遺跡群内にある事、又、半清盛が開いたといわれる袖の湊推定地にあたる事などから、当該地に埋蔵文化財の包蔵を予想した。そして59年11月12日試掘調査を行ない、予想通り埋蔵文化財の包蔵を確認した。埋蔵文化財課では、この調査結果をもとに遺跡の取り扱いについて協議をかさねたが、設計変更は無理という事で、やむなく記録保存の為の調査を行なう事となった。調査費用は原因者が負担し、昭和60年7月1日から本調査を行なった。

なお今回の調査にあたっては委託者の東京海上火災保険株式会社福岡支店、及び施工業者の大成建設株式会社の皆様には多くのご理解とご協力をたまわった事を記して深く感謝する次第である。

調査面積：330m²

調査期間：昭和60（1985）年7月1日～9月14日

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会教育長 佐藤善郎

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

第2係長 飛高憲雄

調査庶務 第1係 松延好文

調査担当 第2係 山崎龍雄、常松幹雄、加藤良彦

調査・整理補助 大内士郎、中村昇平、平川敬治

なお、発掘調査、資料整理にあたっては地元の多くの方々の御援助・御協力を得た。また塙屋勝利、松田又一、木村幾太郎氏には調査・整序報告にあたり多大の指導・助言をいただいた。

3. 調査経過

- 1985年 7月 1日 業者による表土・擾乱土の掘削・搬出後、2次掘削にかかる。
- 7月11日 上面遺構検出開始。
- 7月12日 1・2号トレンチ設定。
- 7月17日 2号トレンチ拡張、南東部に土留板確認。
- 7月25日 3・4号トレンチ設定。
- 7月31日 上面全景写真撮影。
- 8月 2日 S E 2号井戸東南側に幅広の土留板検出。
- 8月 3日 6号トレンチ設定。土留板の検出にかかる。
- 8月 6日 7号トレンチ設定。客土下に相当数の杭列、捨石列がある模様。
- 8月 8日 8号トレンチ設定。6号トレンチと同様の土留板確認。
- 9月 3日 捨石上部の客土除去終了。下面遺構全景写真撮影。
- 9月 4日 松田又一氏来訪、土留板が和船廻材の転用であることを確認。
- 9月10日 X列土留板写真撮影。船材と思われる杭、板の掘抜き開始。
- 9月13日 ユンボにて砂層（基盤層）掘下げ、土師器破片採取。
- 9月14日 堀抜き終了。一部埋戻し、現場撤収。



図1 調査区発掘調査風景

表1 博多遺跡群調査地点一覧表

次	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積 (m ²)	調査期間	備考(調査担当)
1	7810	納骨堂建設	御供所町・東長寺境内	360	78.11~79.1	本調査(山崎龍雄、浜石哲也、池崎謙二)
2	7928	ビル建設	祇園町99	約100	79.4	立会、上層調査(山崎)
3	7929	納骨堂建設	祇園町・萬行寺境内	240	79.11	本調査(柳沢一男、横山邦繼)
4	7930	ビル建設	冷泉町7-1	1,100	79.12~80.3	本調査『博多Ⅰ』1981、『博多Ⅱ』(岡版編)1982(折尾尾)
5	7931	ビル建設	下久保町346		79.12	試掘調査・地表4.5mから既石出土(柳田紀季、二宮忠司)
6	7932	ビル建設	冷泉町155他	640	80.3~4	本調査(折尾)
7	8023	ビル建設	祇園町130	210	80.6~8	本調査(折尾、池崎)
8	8024	木堂建設	御供所町・東長寺境内	600	80.8~10	本調査(池崎)
9	8025	ビル建設	下久保町75		80.9	試掘調査(横山)
10	8026	ビル建設	冷泉町474-9	54	80.12	本調査『博多Ⅰ』1981(池崎)
11	8027	ビル建設	御供所町3-30		80.12	試掘調査(横山)
12	8127	ビル建設	中兵衛町152・153		81.6	試掘調査(横山)
13	8128	ビル建設	駅前1丁目121~127		81.7	トレンチ調査(横山)
14	8129	ビル建設	店屋町4-15	255	81.8	本調査(池崎)
15	8130	駐車場建設	上兵衛町569	100	81.8	試掘調査(横山)
16	8131	ビル建設	店屋町246~248	150	81.9	本調査(杉山富雄、池崎)
17	8132	ビル建設	駅前1丁目98	910	81.11	本調査『博多Ⅱ』1985(柳沢、杉山)
18	8156	ビル建設	駅前2丁目8-14		82.1	試掘調査(横山)
19	8323	社務所建設	梅田神社境内	200	83.4	本調査(力武卓治、大庭康時)
20	8324	ビル建設	駅前1丁目99	980	83.4	本調査『博多Ⅱ』1985(柳沢、杉山)
21	8325	ビル建設	駅前1丁目18-1	150	83.5	本調査『博多Ⅱ』1985(柳沢、杉山)
22	8327	ビル建設	冷泉町189他	810	83.9	本調査『博多Ⅱ』1985(柳沢、杉山)
23	8334	本堂建設	熊宮寺境内	約300	84.2	本調査(折尾)
24	8433	ビル建設	冷泉町1-1	250	84.4~5	本調査『博多Ⅲ』1985(横山、下村智)
25	8434	ビル建設	祇園町1-1	100	84.5~6	本調査『博多Ⅳ』1985(横山、下村)
26	8506	ビル建設	上久保町34	134	85.5~6	本調査『博多Ⅴ』1986(力武、大庭)
27	8507	ビル建設	祇園町1-11	350	85.5~6	本調査『中部地区埋蔵文化財報告書第Ⅱ集』1987に併載(井沢洋一、宮松幹雄)
28	8508	ビル建設	御供所町70-2	1,800	85.5~8	本調査『博多Ⅵ』1987(井沢、山崎、米倉秀紀、宮松)
29	8509	ビル建設	綱町22-67	330	85.7~9	本調査『博多Ⅶ』1987(山崎、常松、加藤)
30	8605	ビル建設	御供所町36-37-38-39	495	86.5~7	本調査『博多Ⅷ』1987(常松、加藤)
31	8606	ビル建設	御供所町65-66	190	86.5~7	本調査『博多Ⅸ』1987(常松、加藤)
32	8608	ビル建設	祇園町21-1	約1,000	86.5~7	本調査(佐川茂)
33	8618	ビル建設	祇園町8他	898	86.7~11	本調査(下村、加藤)
34	8645	ビル建設	冷泉町238-2外	40	86.10~11	本調査(力武、常松)
35	8648	ビル建設	上久保町56	655	86.11~	本調査(池崎、加藤)

II. 博多遺跡群29次調査の概要



大水道痕跡（下川端町5番地）

1. 遺跡の位置と環境

市名を福岡とするか、博多とするかとの論争は、明治22（1889）年4月の市政施行では最終的に福岡市と決着した。ところが同年12月に開設された国鉄の中州駅は博多駅と命名され、商業都市としての伝統的呼称は從来通り引き継がれることになった。

一般的な博多の範囲は西を那珂川、東を石堂川に挟まれた南北に延びる一帯で、その南限は現在の博多駅の北、今の町名でいえば祇園町付近にあたる。博多の旧地形がどのようにであったかについては、江戸時代、筑前国続風土記の成立以降、郷土史研究熱が鼎盛ったようで、その頃の所産が博多古図となって今に伝わっている。だが、それらの古図が、古代・中世の地形を如実に再現しているかは、再考の余地があるようである。例えば、その一つが袖の湊の描写である。「石城志」（図3）・「伏敵編」・住吉神社蔵の古図では、沖ノ浜が独立した島になっていたり、博多浜とは、西南部に架けられた橋によってのみ結ばれている。ところが、実際に発掘を行なってみると、大博通りと国道202号線が交差する地点で、11世紀後半～12世紀にかけての遺構が検出されたのである。つまり平清盛が大宰大司に任せられた時期には、既に陸地であったわけであり、古図が事実に反していることが判る。

そこで、現在の標高を手懸りに、博多の町に等高線を書き出して推定を試みようということになった（図4）。この方法によって復元された沖ノ浜は、東西に長い橢円形の広がりを見せており、この点では博多古図に共通している。しかも4mの等高線は、大博通りと国道202号線



図2 慶長御城廻絵図（福岡市美術館蔵）

が交わる呉服町交差点をヴァリッジとするかのように博多浜へつながっている。

またこれまでの試掘調査の結果、4mと3mの等高線の間に河川の氾濫原などの落ち原が確認されていることから、およその推定ができると思う。

それでは、29次の調査区の立地について考えてみよう。調査区の南をはしる国道202号線が新設されたのは明治41（1908）年のことで、それ以前に通りに面していたのは、東側の南北の町筋だけだったようである。江戸時代の絵図によると、この区画内には、那珂川と石堂川を結ぶ博多大溝がカギ状に流れている。大溝の役割りに関しては、調査区の南東部にあったとされる楊池やその東の蓮池などのよどみを浄化する意図もあったのではないかと思う。大溝の流路は、道路や町筋を変えるほどの規模ではなかったようである。

大閑町割は、明治以後、博多駅の開業、それに伴う道路拡張、道路の新設、路面電車の敷設という近代化によって第1次変換を遂げた。その後、戦災によって焼け野々原となった町は、めざましい復興により、旧米の活気を取り戻した。これを第2次変換期と呼ぶことにしよう。そして高度経済の成長期を経た後、博多の町名は統廃合され、地下鉄も走るようになった（第3次変換期）。高騰した地価に有力企業の進出は目ざましく、狹小な寄合所帯がいつの間にか近代的ビルに立代わる此頃である。大閑町割から400年を経た今、博多は、寺院の緑樹に古のたたずまいを止めながら、第4次変換期への胎動を続けている。

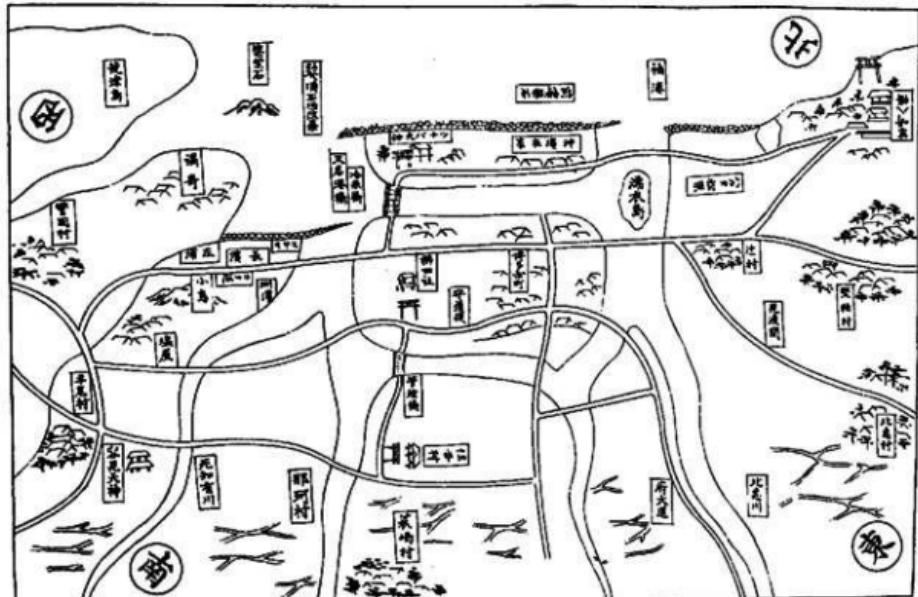


図3 博多古図（「石城志」より）



図4 博多遺跡群調査区位置図 (1 : 10,000)

数字は調査次数を表わす。

(表1参照)

A—地下鉄烏森町工区調査区

B—地下鉄店町町・祇園町・博多駅前工区調査区

C—都市計画道路博多駅一基港線抜幅部調査区

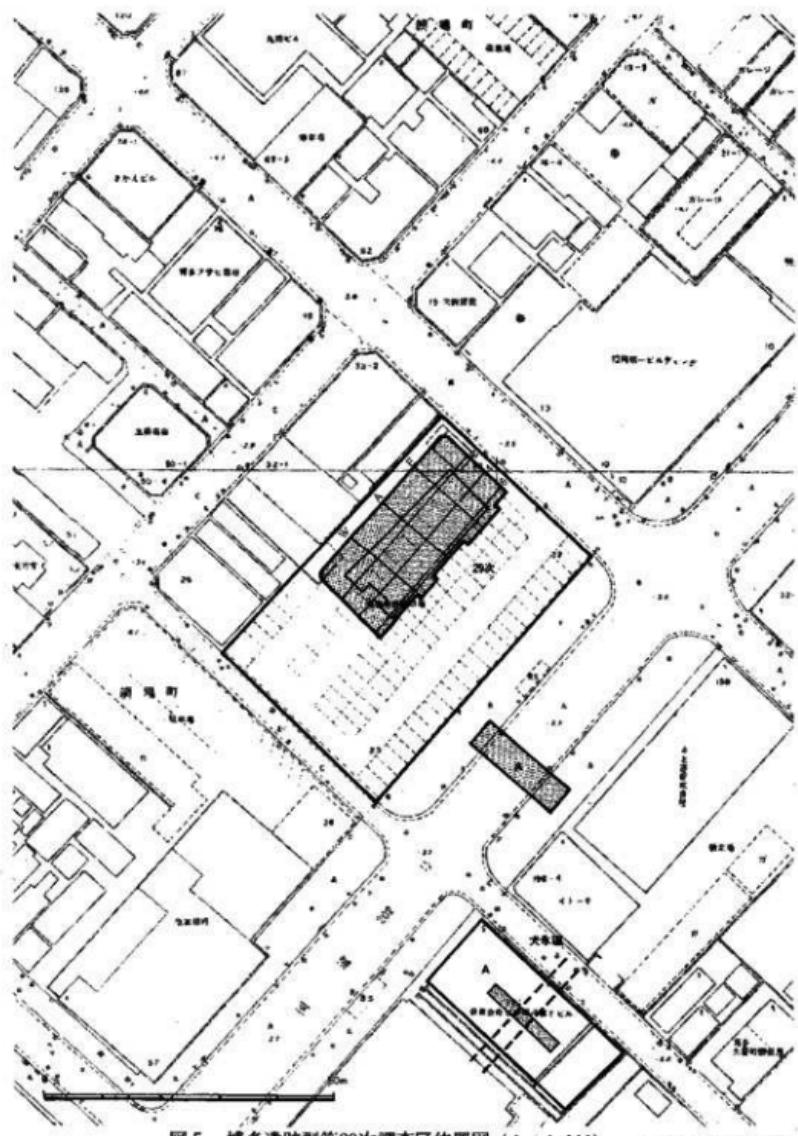


図5 博多遺跡群第29次調査区位置図 (1 : 1,000)

A—地下鉄久留米工区開発区

2. 博多遺跡群29次調査の概要

博多遺跡群29次調査地点は、「沖の浜」と「博多浜」の二砂丘間にはさまれた南西側に開く低地のはば中央部に位置する。現地表面の標高は3.3m前後を測る。

対象面積は2,297m²であったが東部、西部及び南部は構造物の基礎によって潰滅状態であり、比較的残りの良い北部の330m²を調査対象とした。

当該地は平清盛の開削によると言われる「袖の浜」の推定地に当たり、試掘結果においても地表下約2mの地点で多数の杭を検出しており、当初より「袖の浜」に関連する遺構を予見しての調査であった。遺構検出・土層観察はこの杭上面より行ない、以下7層の遺物包含層と2面の遺構面をとらえている。検出した遺構は、杭上面の客土上で近世の井戸・土壤等と、下面の中世末から近世初頭と思われる、干潟上に二度にわたってなされた乱杭と船板・多量の瓦砾と客土による埋立遺構である。遺物は上面の近世遺物の他、以下の客土・泥土中より元様式の青花・白磁鉄胎等の稀少品を含む多くの貿易陶磁と唐物・常滑・瀬戸等の国産雜器類・土師壺・皿等の他、漆器椀・下駄等の木器類、犬・猫・亀・真鯛等の獣・魚骨が出土している。

層位 図6のように複雑な堆積であるが、大きく7層に分けられる。

1層 暗褐色～黒灰色砂質土 近世遺構が切り込んでいる最上面の客土。図6のW・Eラインの柱状図は、調査区の安全確保のため45°の法面にコンクリートを吹き付けられていたものを、最終日にこれを剥ぎ取り確認したものである。直接調査区の土層図とつながらないがこれを参考にすると、上からa-アスファルト・バラス、b-黒褐色土・黄褐色土上の客土上、c-暗灰褐色土で多量の焼土炭化物を含む博多人空襲時の整地層、d-暗灰褐色砂質土、1層土となつており、上面を標高約1.3mにとって30～50cmの厚みで全面を覆っていると考えられる。3層土と酷似する。

2層 黒褐色～黒灰色粘質土 二度目の汚泥の堆積層であり西南部のみに広がる。3層上の影響でやや砂質を帯びる。遺物は少ない。

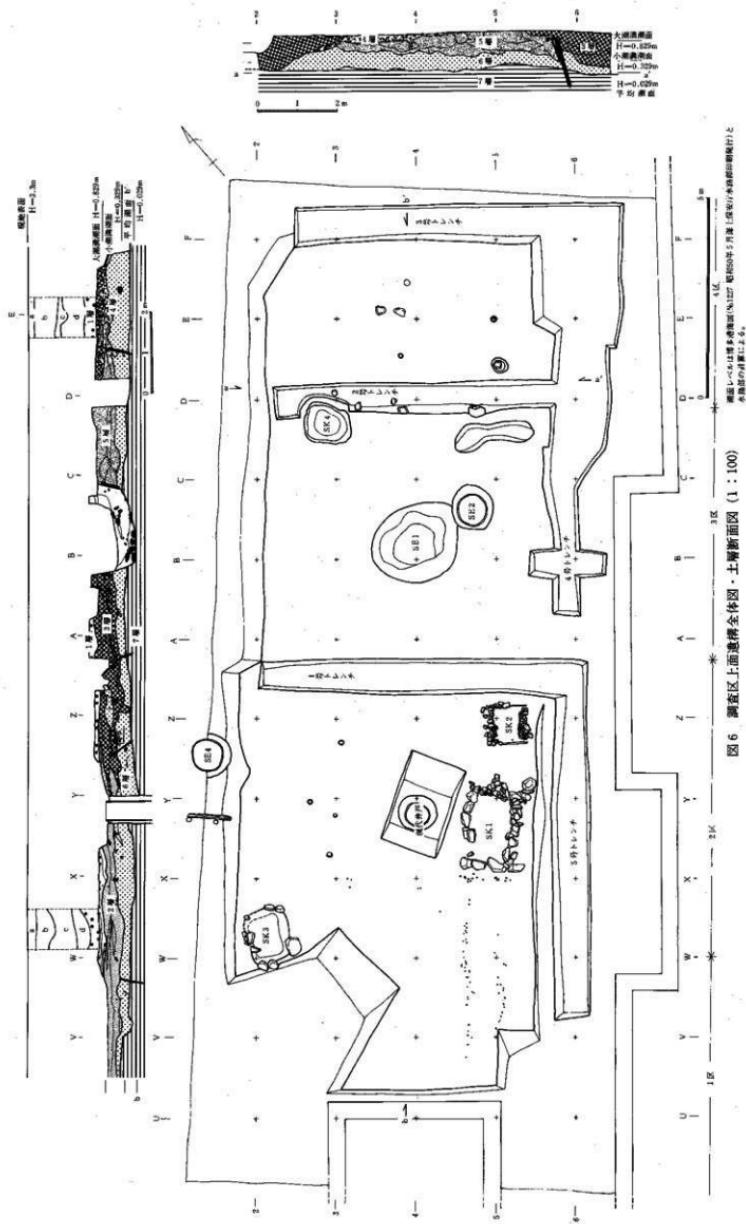
3層 暗褐色～黒灰色砂質土 花崗岩の粗砂を多量に含む今回の主体をなす客土層。上面を覆っていたであろう土留の瓦砾列により三つに区分できる。多量の遺物を含む。

4層 暗褐色～黒灰色粘質土 6層の泥土を客土（5層）上にかき上げたもの。同種のものは3層中にも数ヶ所認められる。木器・自然遺物を含む。

5層 暗褐色～暗青灰色土 花崗岩バイラン土のマサ上による客土層。河口附近堆積の精良なものを使用している。遺物は若干含む。

6層 黒褐色～黒灰色粘質土 調査区全面を覆っている干潟の堆積土。遺物は少ない。

7層 灰色砂 標高を5～40cmに取る。南西側がやや高目になっている。地下鉄工区のボーリング調査により海面下10m程度までの堆積が確かめられている。遺物は海面下1.5～2.0mの地点で土師器壺の小片を一片採取したのみである。



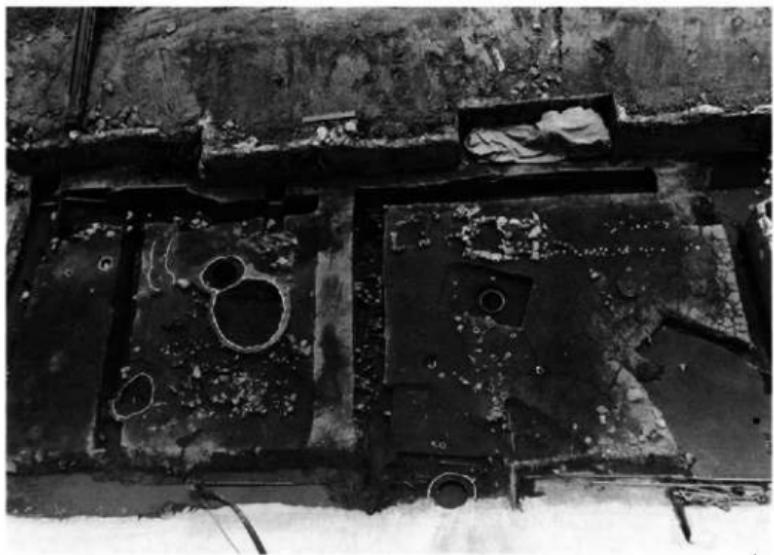


図7 調査区上面遺構全景（北西より）



図8 調査区上面遺構全景（南西より）

3. 上面の遺構・遺物

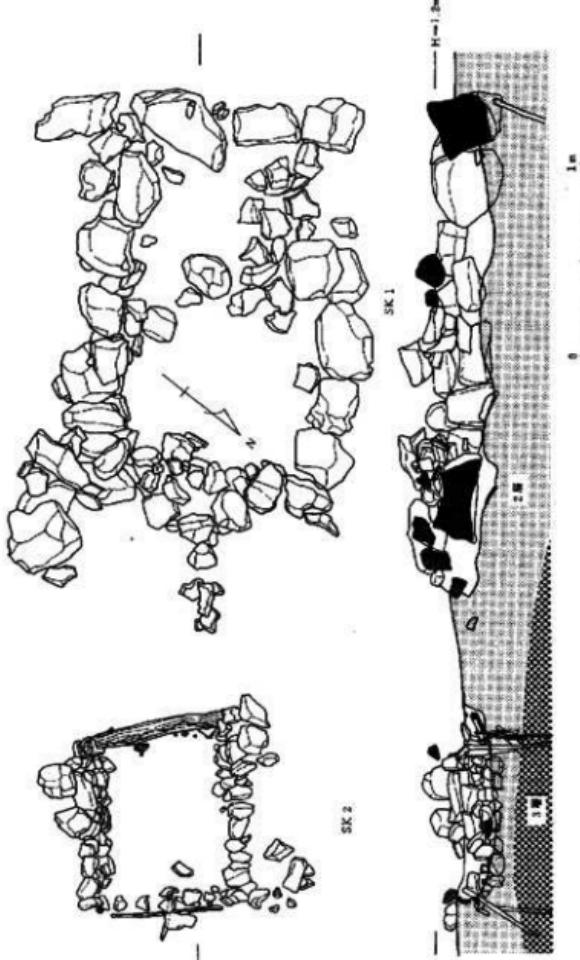


図9 SK 1・2号土壙 (1:30)

4基の土壙と3基の井戸、若干の掘立柱建物の柱板、溝状遺構を検出している。

(1) SK 1・2号土壙(図9・10・11) X～Z-4・5グリッドに存する。長軸をSK 1はN-53°-Eに、SK 2はN-48°-Eにとる。SK 1の南西に2列の竹杭列が続くよう見えるが(図6・10)、図9の断面図でわかるようにSK 1の腰石が竹杭上に乗っており、明らかに竹杭列に後出するものである。掘方は、周囲の土と覆土が近似しており、土層断面観察で辛うじて判別できる程度で判断としない。

上半が崩れているが、1・2号とも積石の平坦面を内面にそろえ、内部には灰や砂がレンズ状に堆積しており、また底面が粘土層(2層)で止まり、下の砂層に達しておらず井戸ではない。水溜め状の遺構と考えられる。

SK 1は内法1.75×1.05m、深さ30cmを測り、SK 2は同様に0.9×0.75m、深さ25cmを測る。SK 2は、北西・南



図10 SK1号・2号土壙（北東より）

東の2面は石組みがみなされているが、北東・南西面は木杭と横板のみで処理されている。石自体も1号に比べずっと小ぶりである。砂丘上立地のための石材の稀少性に起因するものであろうか。同種の遺構は博多



図11 SK2号土壙（南西より）

築港線の調査でも多く検出されている。

出土遺物（図12）001～029はSK1、030～032はSK2出土である。001は口縁直下をすっぽん口にする黒釉天目碗、002は高台付白磁皿、003は明青花碗で外面口縁下に團線と草花文、内面に團線を施す。004・005は明青花皿とともに疊付の釉をかき取る。004は見込に二重の團線と十字花か花樹文を、外面腰部に二重の團線と唐草文を施す。見込にハマ痕跡あり。005は見込に二重團線と花文、外面高台脇に團線を施す。土師器皿は口径6.4～7.3cm器高1.2～1.8cm（006～008・011～013）に多くまとまり、杯も口径10.6～12.6cm器高2.5～3.0cm（017～020）で大きくまとまる。外面の形態により、口縁直下をなでくぼませるもの（006・007・009・010・012・014・015・017・018・019・020）と胴中位以下をくぼませるもの（011・013・016・018）とに区分できる。全て右回転である。022は備前Ⅳ期の大甕の口縁で玉縁外面に2条の凹線を施す。推定口径約32cm。024は土師質の土鍋。内面にやや左下がりの細かなハケ調整を施す。口径40cm前後。028は瓦質の捏鉢。口唇をハケ調整具で面取りし、肥厚した口縁外面にも縦方向の粗いハケ調整を行なう。口径約11cm。029は瓦質の土鉢である。長径（切目方向）3.3×短径2.8×器高3.0cmの下ぶくれの扁球形をなす。以上001以外大体16世紀後半から17世紀前半代におさまる。

SK2は土壙内部からの遺物の出土ではなく、掘方からの出土である。030は龍泉窯系青磁高台付皿。全面施釉後外底を輪状にかき取る。031は土師器皿。口径12.1cm器高2.5cm底径5.1cmを測る。032は瓦質火舎で手培りの窓が見受けられる。器表には銀化が見られ、体部内面にはハケ調整が

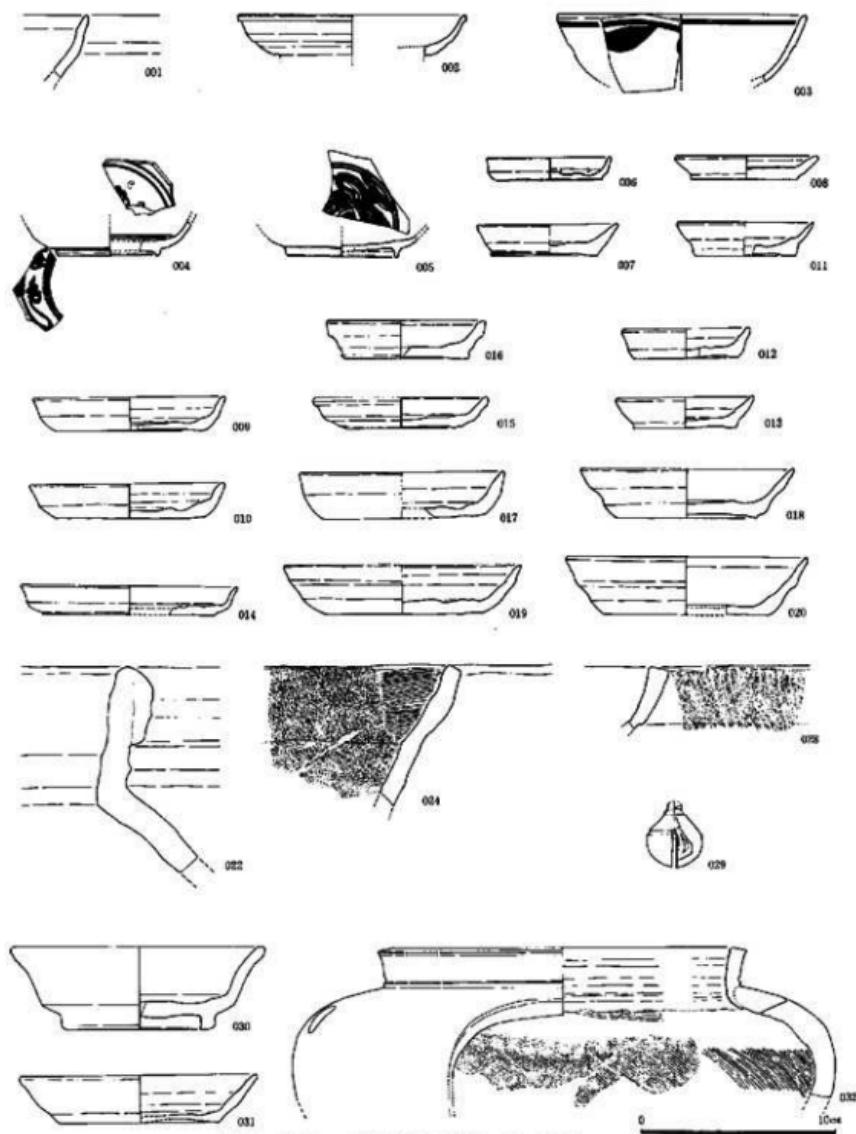


图12 SK 1·2号土壤出土遗物 (1:3)

なされる。以上14~15世紀代のものであるが、下層からの混入と考えられる。

(2) SK 3号土壙 (図13、14) W-2グリッド附近に存する。SK 1・2号と同様に石で囲われている。掘方も同様で明らかにしないが、土壙内部は暗灰色の砂が詰まり明瞭である。内法

で $1.2 \times 1.0\text{m}$ 、深さ15cmを測る。主軸はN-30°-Eにとる。底面も粘土上(2層)で止まっており、同様に水溜め状のものと考えられる。

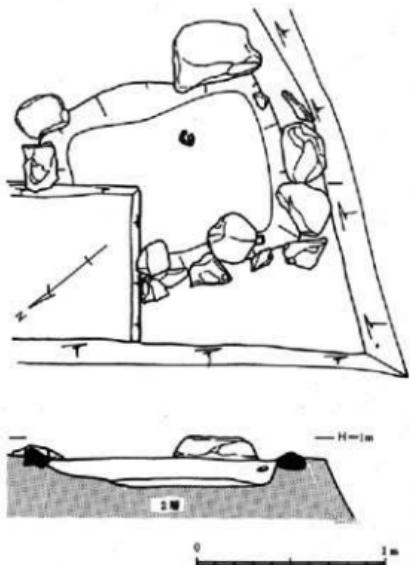


図13 SK 3号土壙 (1:30)

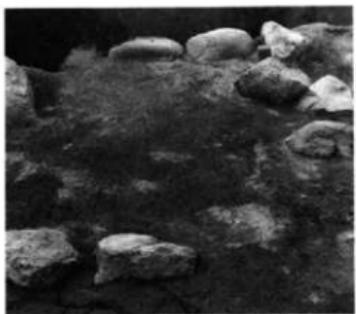


図14 SK 3号土壙 (東より)

出土遺物 (図15) 033は白磁八角杯。内面と外面の腰あたりまでと高台の疊付に施釉後4ヶ所抉り込んでいる。見込みに重ね焼きの目痕が4ヶ所残っている。釉には細かな貫入が入る。034は肥前系青磁小碗。釉は暗青灰色を呈し、下方ほど厚く、高台両脇は殊に厚く垂れかかっている。小さな気泡が多く、半濁している。疊付のみかき取り露胎。035は肥前系染付皿の中央部分である。内面見込に草花文を施す。外底も施釉。036は鉄鑿壹で近世九州内産。胴部外面のやや下、二条の圈線上に文様を描く。土師器皿は口径7.0~7.8cm器高1.2~1.9cmと口径8.2~8.4cm器高1.5cmの二

つに集中し、杯は口径11.6~14.0cm器高2.1~3.0cmにまとまる。形態はSK 1と同様、口縁直下をなでくぼますもの(037)と胴中位以下をくぼませるもの(038・039・043・044)とさらに内湾気味に外反するもの(042・046~048)外湾気味に外反するもの(041・045)とがある。以上白磁は15世紀代、土師器は16世紀以降を中心とするものであるが、肥前系磁器より、17世紀中頃~18世紀前半の時期が考えられる。

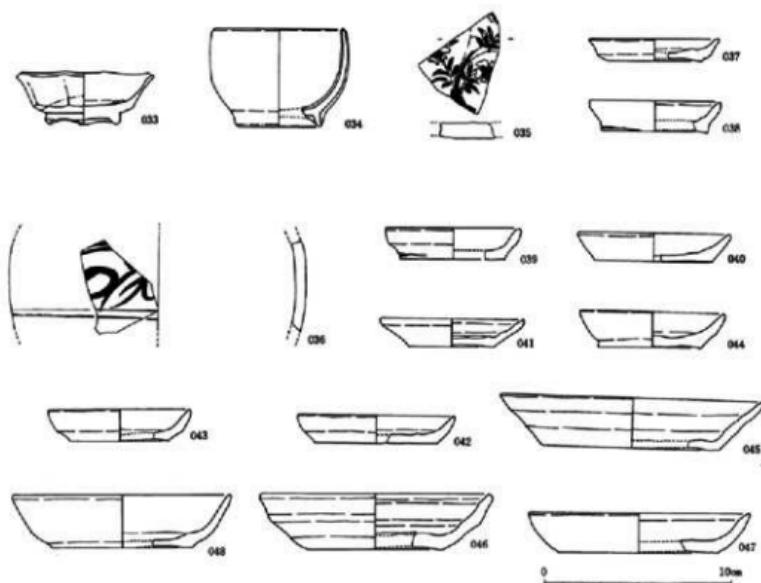


図15 SK 3号土塚出土遺物 (1 : 3)

(3) SK 4号土塚 (図16~19) C-2グリッドに存する。3層を切り込んで設けられたもので腐朽しきっているが、樹根か樹幹を削り抜いたものを容器として杭3本を打ち込み留めている。SK 1~3同様に湧水層までに達しておらず、まして枠自体が内面全体を覆っており水の湧出する状態でなく、井戸とは考え難い。内部には砂・砂質土がレンズ状に厚く堆積しており、水溜め状の遺構と考えられる。内法では $1.24 \times 0.97m$ 、深さ26cmを測る。掘方は明瞭でないが、枠

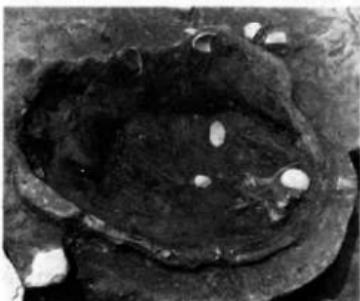


図16 SK 4号土塚 (北東より)

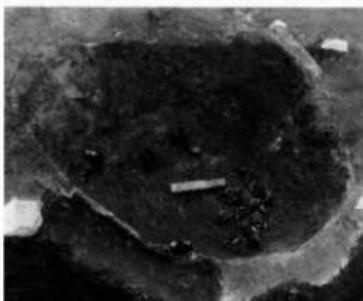


図17 SK 4号土塚掘方 (北東より)

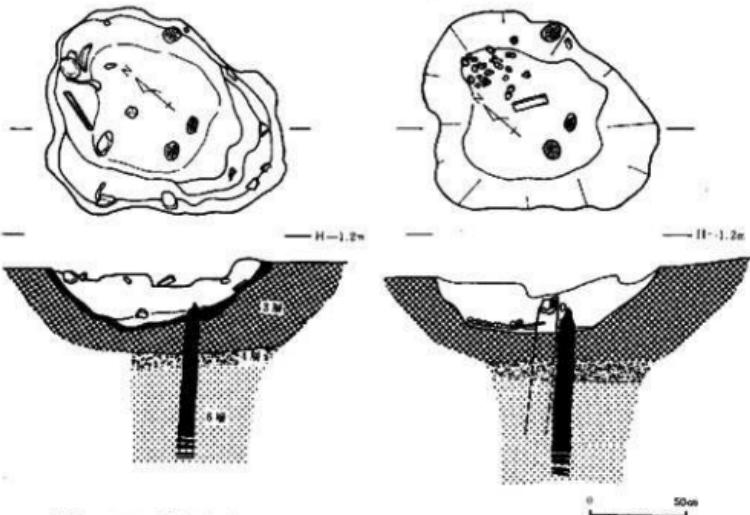


図18 SK 4号土壌 (1:30)

図19 SK 4号土壌掘方 (1:30)

直下に20数個の炭を多くかみ込んだ銀治津と思われる4cm程のものと、呪符と思われる木筒状のもの、滑石製の石錘2個が出土しており(図19)、埋置の際、何がしかの祭祀がなされた様である。

出土遺物(図20)049は肥前系染付角盤の底部片。見込に雷文と菊花を描き高台脇から際に圓線を2条描く。疊付は釉がふき取られている。050は明青花皿。見込に花文を描き高台際に圓線1条を施す。疊付の釉はかき取られている。051は白磁高台付皿I-1類である。釉は外面中位まで。052は瀬戸美濃系の褐釉天目小碗、不透明釉を腰まで施釉する。口径5.5cmを測る。腰盤成形である。053は絵唐津草文四方皿の口縁小片である。054は九州産の陶器掛分瓶。下に藁灰釉上半に粘度の高い鈍釉を掛け。胴部径7.5cmを測る。055は関西系の黄釉陶器台である。胴中央の十字方向に径9mm程の孔を穿がつ。062は中国産か信楽の陶器大甕。縁がかかった灰白～緑褐色の灰釉を掛け、口唇はふき取っている。推定口径40cm前後。065は備前V期の鉢である。胴径19.4cmを測る。外面及び外底は手持ちによる不定方向の指ナデが施されている。緑灰～茶褐色の不透明釉を施釉し、口唇の釉はふき取られている。土師器皿は口径7.8～8.0cm器高1.4～1.8cmに集中する。

以下は柱下からの出土である。060は土師器杯である。口径10.4cm器高3.7cm底径5.9cmを測る。

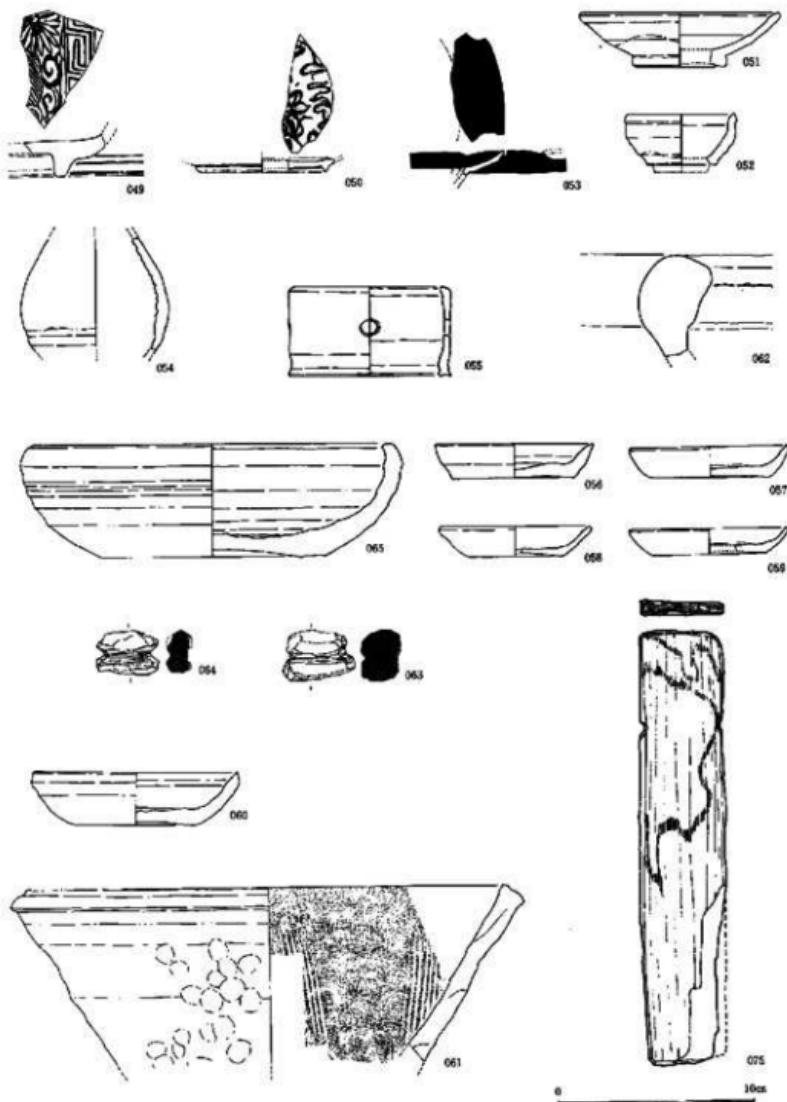


图20 SK 4号土壤出土遗物 (1 : 3)

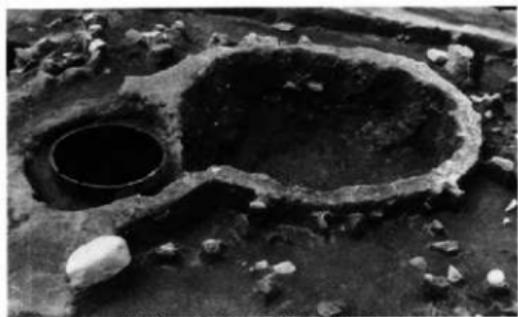


図21 SE 1・2号井戸（北東より）

061は瓦質の擂鉢。口唇上に凹線を1条施し、口唇下端を突帯氣味に整形する。外面は指頭圧痕が多く残り、成形中の手摺れが目立つ。内面は右方向への細かなヨコハケ後、6条単位の粗い横目を通す。063、064は滑石製石錘。刀子による粗い成形で糸掛けも刀子による。075は木筒状の木製品。

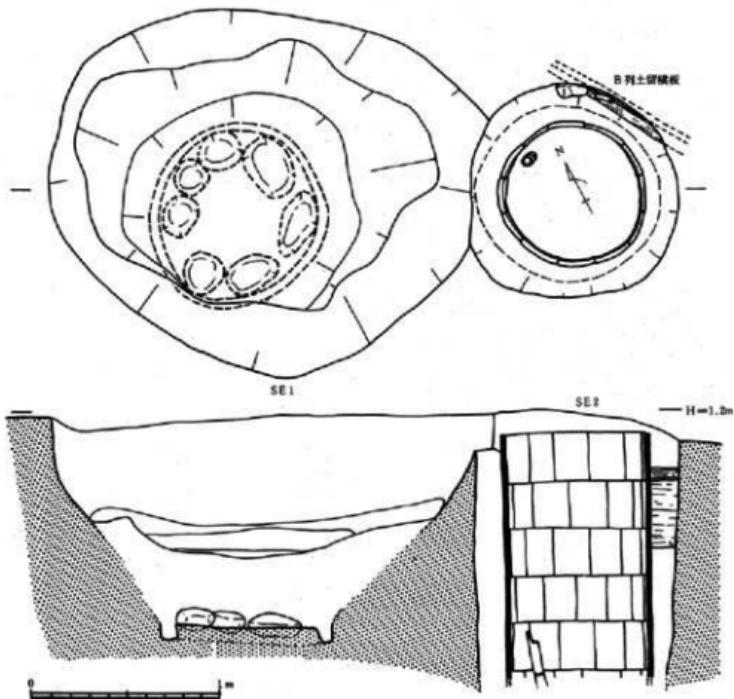


図22 SE 1・2号井戸（1:30）

22.2×4.3×0.8cmの杉の板目板を用い、上部両側に挟りを入れる。出土状況から呪符と考えられるが、表裏ともに文字は観察できない。以上混入があるが16世紀末～幕末であろう。

(4) SE 1・2号井戸 (図21・22) B-3・4グリッド附近に存する。1号が2号により切られている。1号は掘方が2.3×2.0mを測る。井筒を破線で示しているが、これは実測時の掘削が足らず、調査最終日ユンボでのダメ押し中に確認したため誠に不明を詫びたい。枠は桶と思われ

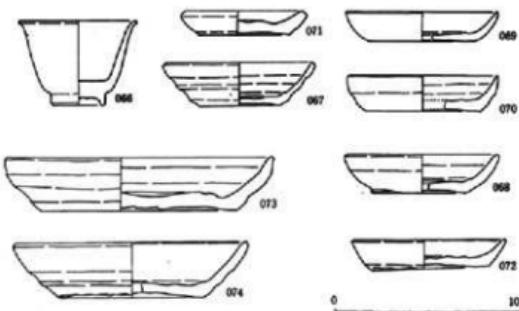


図23 SE 1号井戸出土遺物 (1:3)

れ、内径86cmを測る。底面にはこれに沿うように15～30cm程の円縁を7個巡らしている。底面レベルは0.18mである。2号は1段12枚の瓦による井筒で、内部は熱変成を受けた瓦・ガラス瓶等が詰まり、昭和20年6月19日の大空襲により廃棄されたものである。SE 1の

遺物で066は肥前系白磁小

壊、疊付は砂敷き。土師器皿は口径8.0～8.3cm器高1.6～2.6cmに集中する。白磁より時期は17世紀中頃と思われる。

(5) SE 4号井戸 (図24・25) Y-1グリッドに存する。2号同様1段13枚の瓦による井筒で内径64cmを測る。下部は幅5～10cm程の21枚の松板が桶状に巡っている。熱変成を受けた瓦等が

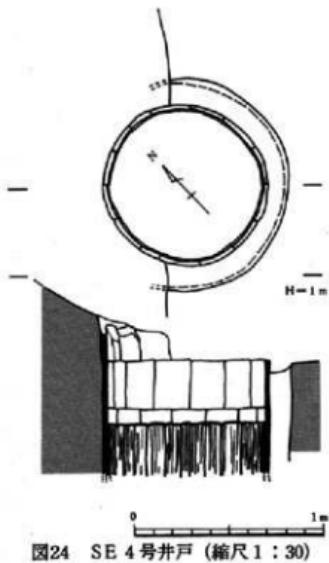


図24 SE 4号井戸 (縮尺1:30)



図25 SE 4号井戸 (南西より)

思われる。これら瓦井戸は博多遺跡群中隨所で見受けられる。江戸後期以降の設置と考えられている。

4. 上・下面間の遺構

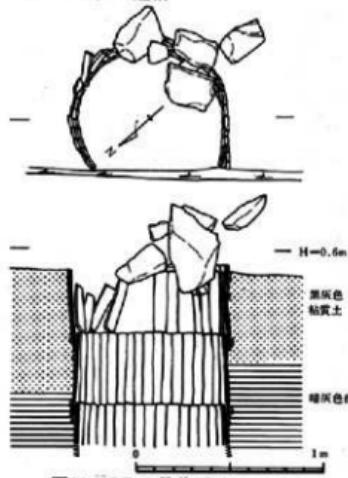


図26 SE 5号井戸 (1 : 30)

1層と3層間に存するもので、2度目の干渉の形成中に設けられたものと考えられる。

(1) SE 5号井戸 (図26・27) E-1・2グリッドに存する。ダメ押し中の最終日前日に検出。軟弱地盤のためSE 1と同程度の掘方が想定されたが確認できず。井筒は上径76cm下径82cm深さ45cmの桶を4段以上重ねたもの。検出面が3層



図27 SE 5号井戸 (北西より)

掘下げ中の標高50cm前後、既に最上段は削られその上に投石がなされた状態で、井筒内上半には1層か3層の黒灰色砂質土が詰まり、少なくとも1層客土以前の設置である。

(2) 竹杭列 (図28) U-X-4・5グリッドに存する。長軸をN-40°-Eにとり、「コ」の字状に、径2~3cm程の先端を片切りにした竹を30cm程の狭い間隔で間に横木を挟み込むように2層土に立てている。埋立に關係するものか垣網等の漁に關係するものであろう。

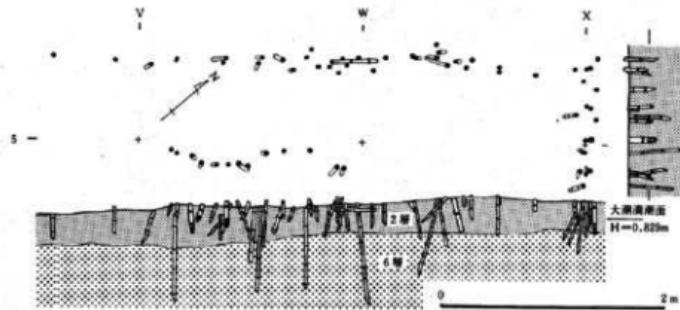


図28 竹杭列 (1 : 50)

5. 下面の遺構・遺物

上面の近世遺構下に2面の干潟泥土（2層・6層）とそれを覆う2面の客土層（1層・3～5層）を検出しており（図6上層断面図参照）、2度にわたる埋立の状況が認められる。

上層（1層）の埋土中には、この調査範囲内では明瞭な遺構は確認できなかったが、下層（3～5層）の埋土中からは客土流失を防ぐためになされたと思われる乱杭・横板（船板）・捨石（瓦礫）による土留遺構を検出している（図29～31）。

江戸明和年間成立の『石城志』（註1）巻之二 地理下「大水道」の項によると「蓮池町入定寺・本岳寺・の間より、川端町鏡天神のかたはらまで、東西に溝れり、今、是を大水道と云。いにしへ、袖の湊の入海の址也。貝原翁曰（註2）『天文廿一年より、異國の舟絶て来らず、此時より袖湊も漸あせて埋もれり。（黒田）長政公此国を初て領し玉ひし慶長五年まで、わづかに四十九年なりしが、此袖湊は既になくなりぬ、土地変遷の速なる事かくの如し』と。今按に、此入海は自然に埋もれたるにはあらず、人力を以て埋められし也。或記曰、博多・中の海埋められしは、慶長五年（1600）正二月の事也、其頃、市中焼て廣野となりしかば、国主金吾中納言（小早川）秀秋・桂主水・三井四郎衛門・に命じ、其焼灰を以て入海を埋められしが、又、湊橋も焼落たりしを、三間短めて懸たり。同十八年（1613）の冬、長正公、寺田茂兵衛、坂井六兵衛、に命じて、先年埋め残せし處をうめ、其上に町家を建て」と、又「東町・呉服町・西町・等の地は、甚低くして、魚町筋・石堂筋は高し。是むかし入海なりし時、南北の両岸なりし事、いちじるし。殊に、西町・呉服町邊の地を穿つ事深ければ、漂浮・或は船具の類出る事まま多し。」と有り（カッコ内筆者註）、まさに記述を裏づける状況を呈している。

埋立遺構は北西から南東へ、主軸をN-46°～53°-Eと、現街区（太閤町割）に沿った方向をとり、1次にわたって客土がなされている。客土と工法の差異により、大きく2つの工期に分けられる。

遺物は3層に集中しており、熱を受け明赤褐色に発色した瓦片を多量に、元様式青花、白地鉄絵をはじめとする貿易陶磁器・常滑・備前等の国産雜器類・土師器等、6層を中心として漆器碗・下駄等の木器類等、多くの遺物を検出している。

以下詳述する。

（註1） 津田元顕 校定・津田元貫 編纂 「石城志」 卷之二 明和2（1765）年

（註2） 貝原益軒 編著 「筑前国統風土記」 卷之四 元禄16（1703）年

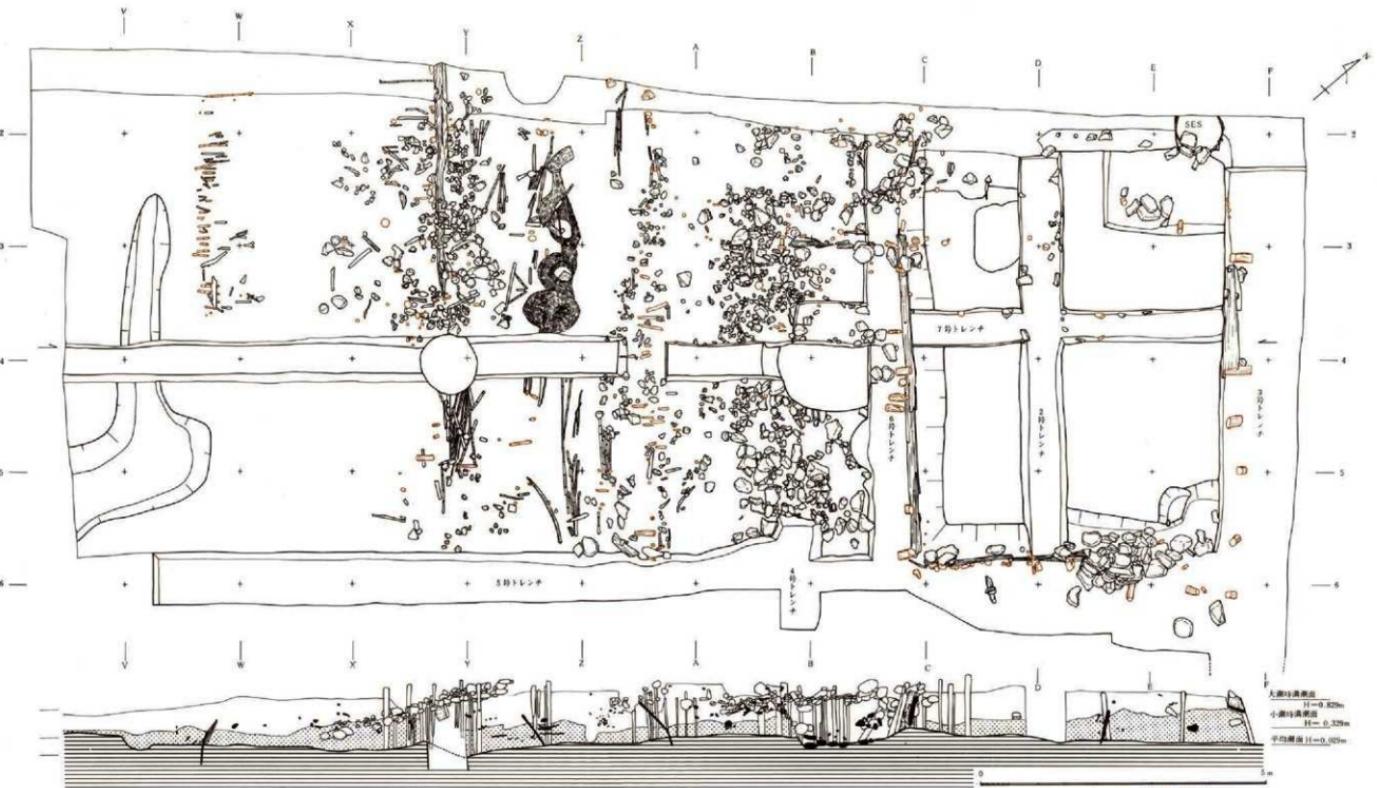


図29 調査区下面遺構全体図・断面見通し図 (1:70)

(赤線は立杭を示す)



図30 調査区下面遺構全景（北西より）



図31 調査区下面遺構全景（南西より）

(1) 船板・石垣による土留と埋立－1期工事

B～D－2～5グリッドになされた調査区内での最初の埋立である。2号、7号トレンチの土層観察(P11・図6)によると、干潟泥土(6層)上にマサ土(5層)を約 6×4 m厚さ20～60cm程の島状に客土し、入江の内側に面し、波にさらされる南東面(B列)と南西面(5列)のほぼ直角方向の2側縁に杭を打ち内側に法面をとて土をかき上げた後、土留の横板・石垣を設け埋め戻している。

5列の土留(図33・34)は主軸をN-37°-Eにとり、長さ1.3m幅18～22cmの板目板3枚と、長さ1.48m幅22cmと32cmの板目板2枚を縦木に打ち連ねたものを土留とした部分と、それに続く割石を小口に積んだ石垣を用いた部分とに分かれ。石垣は基底部に土台木もなく、石の間の目貼りもない簡略なものである。北東端は近現代の擾乱によって破壊されており、末端部が不明だが、客土部分より大きく延びるものではないと思われる。

B列の土留(図35・36)は主軸をN-53°-Wにとり、長さ5.75m幅55cmの日本形構造船の船体右舷の部材(上棚)を土留の横板の主体として転用している。(図32・図67)杭の一部にも船材の転用が認められる(B-1・No1, B-2, No3, B-5 No2, C-5 No3)。北西に連なるB-2グリッド部分は3層中に設けられたものであり、捨石がなされる等様相が異なっており、2期工事時に付け足されたものと考えられる。

B列にも杭列が認められるが、大きく近現代の擾乱も受けている部分であり、B列・5列と同時期かは確認できない。仮に近い時期としても、周囲は3層土であり、かつ北東から南西に向かって傾斜しており、B列・5列と大きく異なっている。客土以前の波除の乱杭の可能性が高い。

杭は長さ1～1.8m径10～20cm程の丸太材・割材を用いたもので、他に比べかなり大ぶりである。いずれも先端を角錐状に剣をたてたもので、泥土を突き抜け砂層(7層)中に0.2～1m程も打ち込まれている。



B列横板No.2



X列横板No.2

図32 B列・X列横板(外面)



图33. 5列土留板之石垣 (南面より)

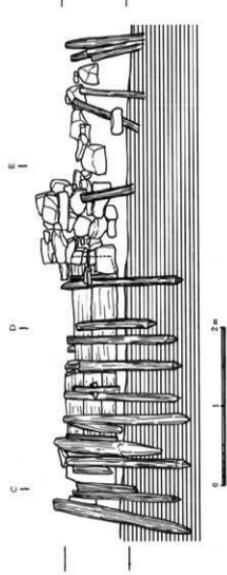


图34. 5列土留板之石垣 (1 : 50)

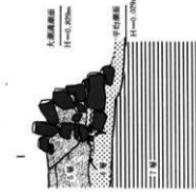


图35. B列土留板 (北面より)

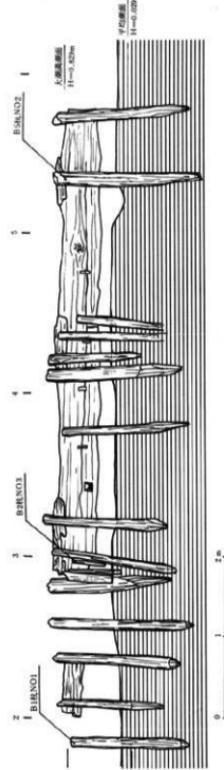


图36. B列土留板 (1 : 50)

(2) 船板・捨石・乱杭による土留と埋立－2期工事

当調査区内での主体をなす埋立工事であり、様相も1期と大きく異なる。間に1期工事のマサ土の客土（5層）を挟んで北東から南西方向に、暗褐色～黒灰色砂質土（3層）を客土する。客土は波洗い部分にあたる捨石によって、B列の1期埋立の先端まで・A列・Z列・X列の4次にわたることが伺がえる。間隔は捨石の先端から先端までをとて、B・A列間が約3m、A・Z列間が約2m、Z・X列間が約5mを測る。主軸はそれぞれ、A列がN-52°-W、Z列がN-48°-W、X列がN-50°-Wをとり、いずれも現街区（太閤町割）の方向に沿っている。

施工法も1期と大きく異なる。杭打ちが客土に先行すると思われ、細手の杭の幾本かは客土の土圧のために外方に傾斜、もしくは折れ曲がっている。乱杭の波除けとしての用途を考え合わせた上でも妥当である。また、杭打ちのための人足の足場固めと思われる竹束の籠築・席等が泥土上に敷かれ、それを留める竹杭・柴杭が目立つのも特徴である。殊にX列・Y列で顕著に見られる（図39～41）。

また、X列はB列同様、長さ4.2m以上（北西側が調査区外に続く）幅28cm程の和船の船体の部材（根板・加敷もしくは根棚）を土留の横板の主体に転用している（図37～42）。他と同様に客土以前の施工と考えられ、横板を設ける内側の泥土上に籠築・席を敷き込み足場とした上で、横板を竹杭・柴杭で仮留した後、板の両側を挟さむように大型の杭を打ち込み本留をし、客土を行なっている。

捨石には円礫・角礫と多量の瓦片、竹や木の根株等も用いられている。角礫と瓦片は火熱を



図37 B列・X列土留板（北西より）



図38. X列土留板（南西より）



図39. X列土留板（北東より）



図40 X列土留板（南東より）



図41 X列龜瓦出土状況（南東より）

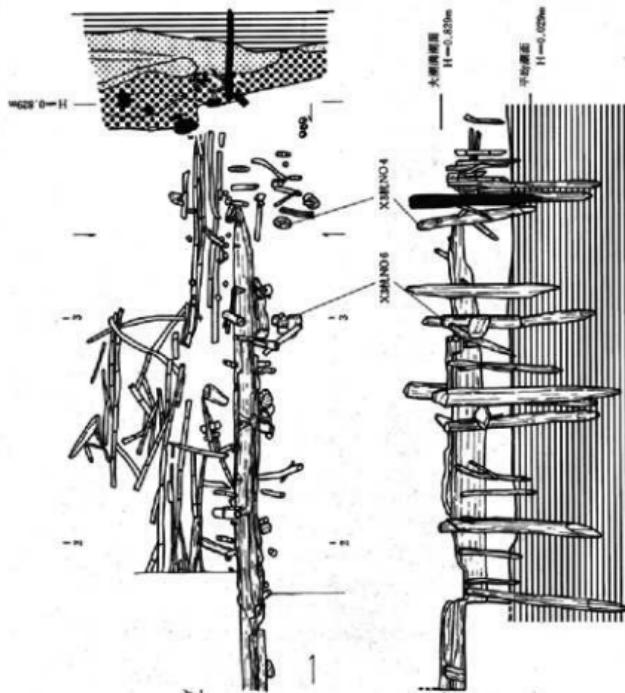


図42 X列土留板（1:50）

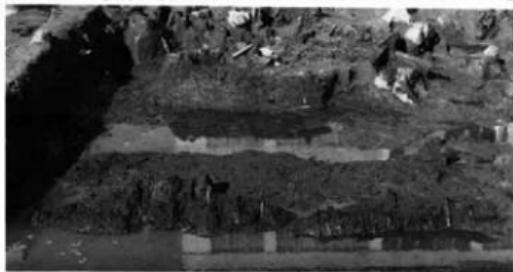
受けたものが多く、
太閤町部時に焼け石
・焼け瓦を塗り込ん
でなされた「博多堀」
のあり方と共に通して
いる。

杭は1期と同様で
あるが小さな杭が目
立つ。船材の転用も
X列にのみ認められ
る（X-2・No.6、
X-3 No.4、No.6、
Y-3 No.2）。

(3) 竹杭列、溝状造構

竹杭列はX列の捨石の先端からこれと同方向に2m程間隔を置いたV-1~3グリッドに存する。長さ20~80cm径3~5cm程の先端を片切りにした竹を、主軸N-46°-Wにとって10cm前後の間隔で1列に内側に傾斜して打ち込んでいる。列は調査区の中央で終わっている。杭の丈の短かいものは砂層(7層)までに達しておらず、明らかに泥土(6層)上からなされたものである。同じく泥土上になされた2層の杭列とは様相が大きく異なる。A~X列までの土留を参考に考えると、魚梁・蕉等の足場固めの流失を防ぐため、本体工事に先行してなされたものであり、各列の埋立の最初の工程と思われる。2期工事の一環として行なわれたものが、何がしかの事由により中途で放棄されたものと思われる。

溝状造構はこの竹杭列の1m程の外側に存する。竹杭列に沿ってS-45°-Eの方向に延び、V-4グリッド附近で南方へ73°角度を振って屈曲している。7層(砂層)上面で最小幅37cm、最大幅118cm深さ3~42cmを測る。6層上面からの掘り込みと思われるが、掘削後、日を置かずして埋まつた模様で覆土と周囲の泥土との区別がつかない。埋没後は若干の壅みになっていた



様で部分的に砂の堆積が見られる。工事の便を計るため、排水用に溝筋を切換えたものであろう。竹杭列と同様に、2期工事の一環として行なわれたものと思われる。

図43 V列竹杭列(南西より)



図44 溝状造構(南東より)

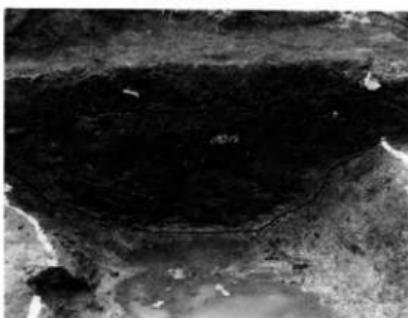


図45 溝状造構土層(北東より)

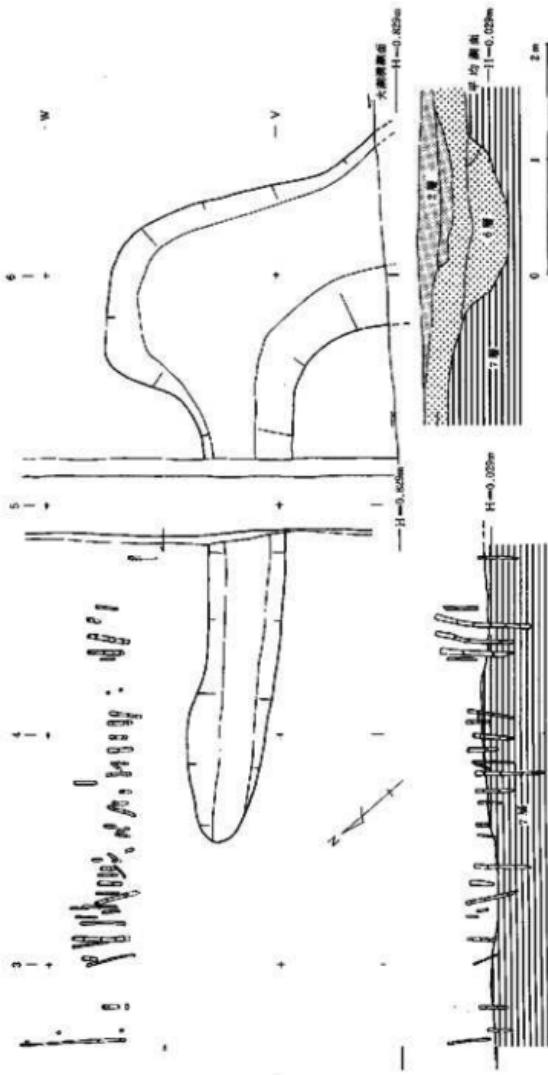


図46. 竹杭列、溝状造構 (1 : 50)

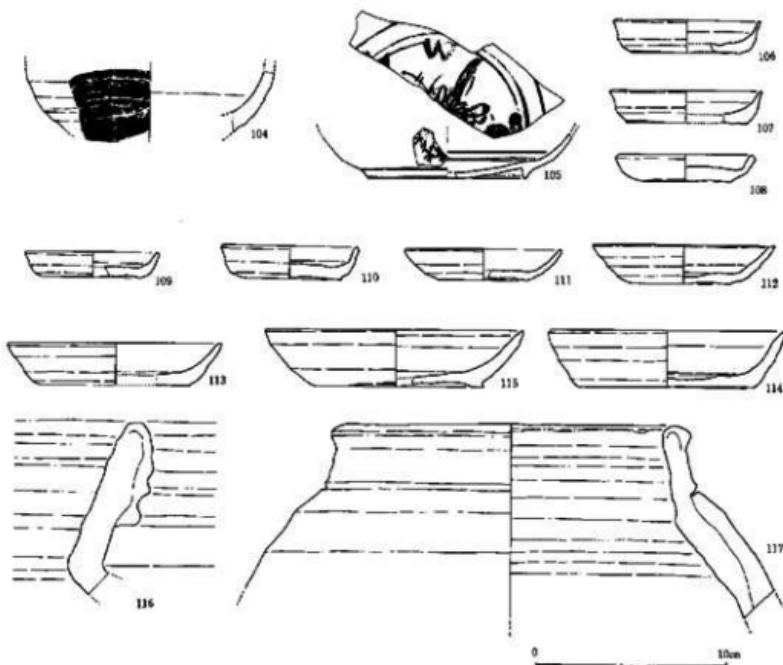


図47 1層出土遺物 (1:3)

6. 出土遺物

(1) 土器・陶磁器

① 1層(図47) 104は唐津刷毛目碗。乳白色の白土を横方向に掻き半濁のやや青味がかった灰色釉を薄くかける。胎土は砂粒を多く含み粗い。105は明青花皿である。高台際に1条・見込に3条の圓線を引き、外面胴部に唐草文・見込に花卉樹石文を描く。釉はやや青味がかった灰白色。胎土は白色を呈す。全面施釉され、器付は砂敷である。底径8.4cmを測る。106~115は土器。全て右回転の糸切りである。106~111は小皿。口径7.0~8.2、器高1.3~1.7cm、底径4.6~6.2cmを測る。112は皿。口径9.5cm器高2.0cm底径5.1cmを測る。113~115は碗。口径11.1~13.5cm、器高2.2~3.0cm、底径7.8~9.2cmを測る。116は備前V期の大甕の口縁。外面に2条の凹線を施す。口径60cm内外。117は同じく備前V期の短頸の壺。頸部外面に深い沈線を1条施す。口径18.6cm。以上下限は17世紀前半が考えられる。

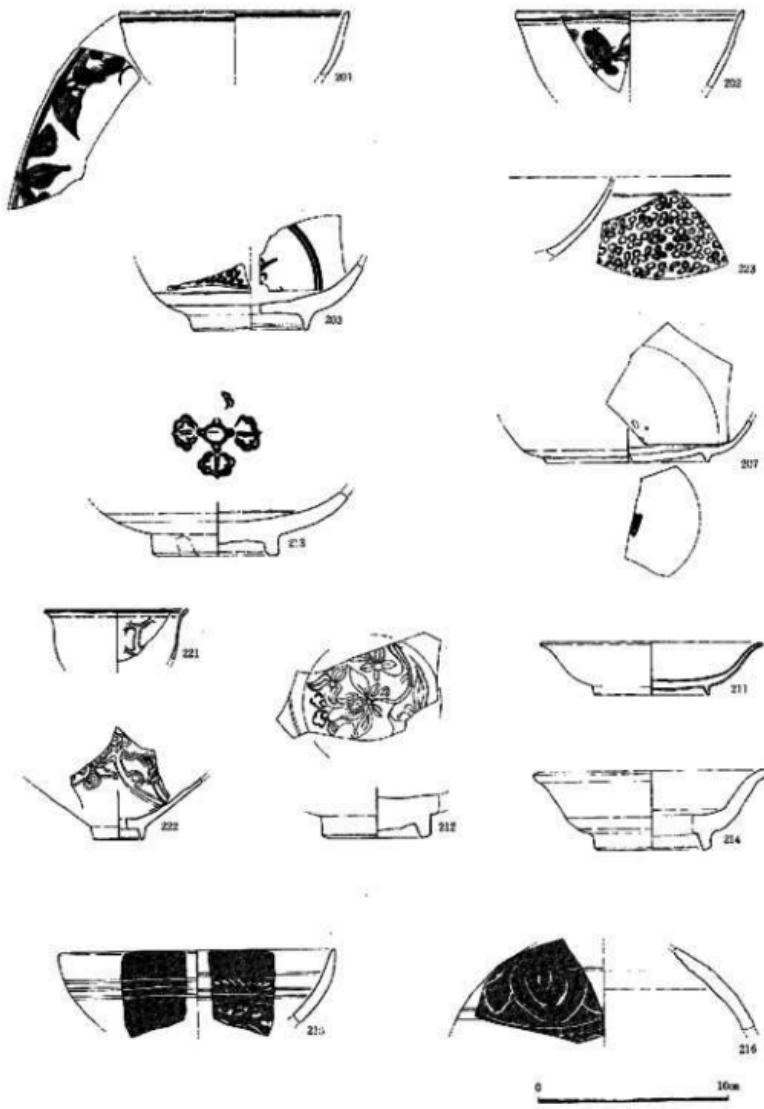


図48. 2層出土遺物(1) (1 : 3)

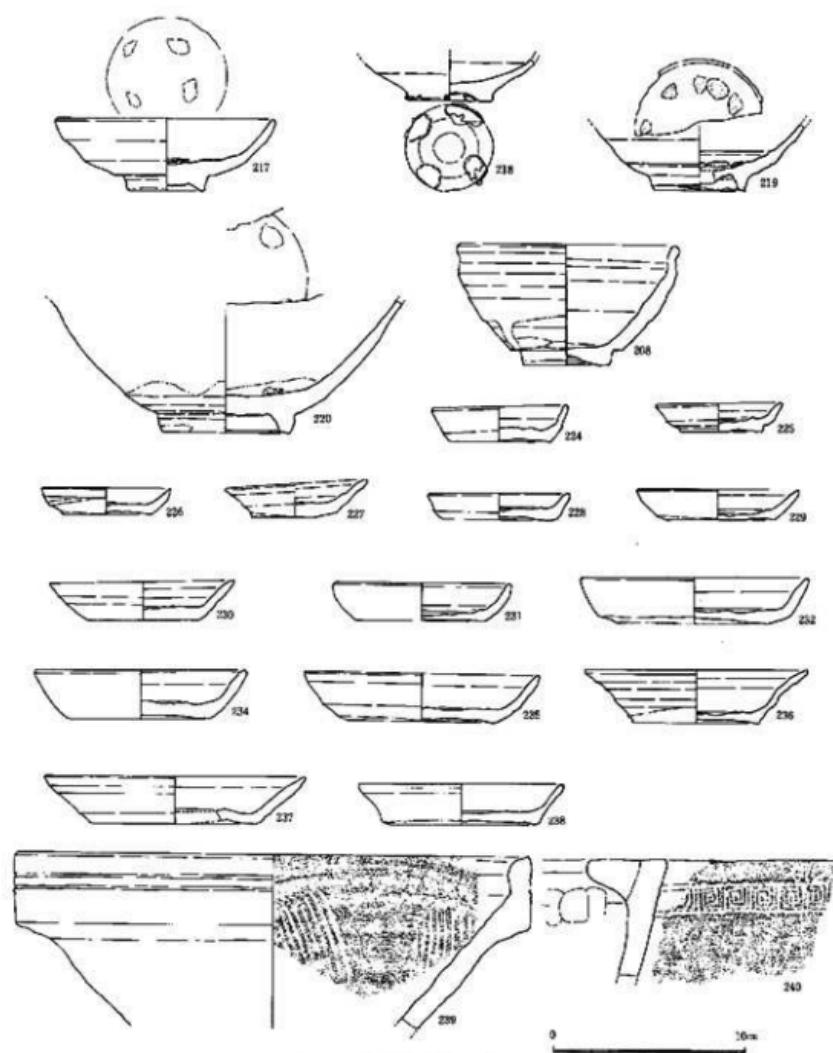


図49. 2層出土遺物(2) (1 : 3)

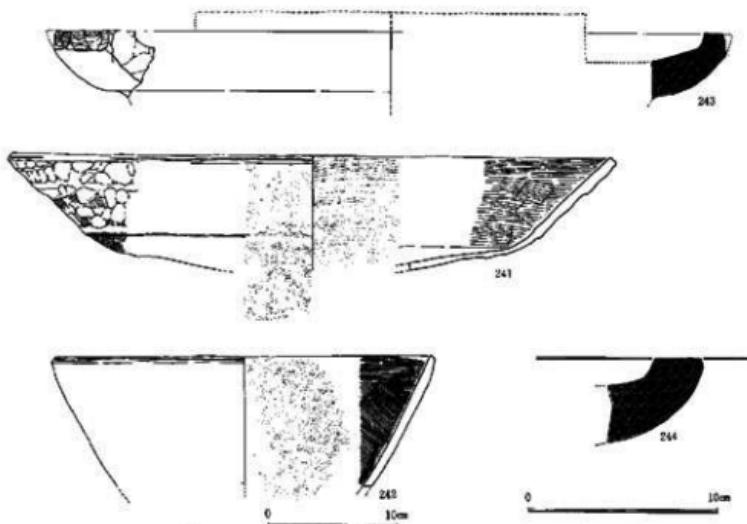


図50 2層出土遺物(3) (1:3、241・242のみ1:4.5)

② 2層(図48~50) 201~203・223(図48)は明青花碗である。201はSK-1の003同様、外面に草花文を描く。202は外面に化鳥図を描く。16世紀後半~17世紀前半。203は外商胴部に便化した唐草文、見込に花文を描く。全面施釉され、高台疊付部はかき取っている。223は蓮子碗。207は明青花皿である。高台内に文字を描く。全面施釉後疊付部をかき取る。16世紀。211~213・221・222は白磁。211は端反りの皿で、全面施釉後高台疊付部の釉をかき取る。212・213は碗で、212は外面下半は露胎。見込に草花文を印刻する。213は高台内~疊付まで露胎。見込に十字花を印刻する。221・222は型打ちにより内面に浮文を施す小皿と碗、221は口鉢状に楕円を施す。ともに全面施釉で、222は疊付部をかき取る。器壁が薄く、胎上も白色の精良なものである。17世紀前半。214は青磁高台付皿。淡青緑色の釉を厚く全面に施釉し、高台内はかき取っている。貫入有り。208は瀬戸天目碗。不透明の黒褐釉を内面と外面上半にかける。胎土は淡灰色。215は李朝象嵌青磁碗。内外面に圓線と菊花文を白土で埋める。釉はオリーブがかかった青灰色、胎上は灰褐色。216は同じく壺で外面に圓線と間の蓮弁を白土と黒土で埋める。釉胎ともに淡褐色。217~220は李朝粉青沙器。217は高台付皿、釉はやや青味がかった乳白、色、胎土は淡褐色。見込と疊付に4ヶ所胎土目が残る。218は釉は黄味がかった乳灰色。胎土は暗灰色。高台内から骨付にかけ4ヶ所の砂目か混ぜ目痕が残る。219・220は217・218の低い削り出し高台に対し、高

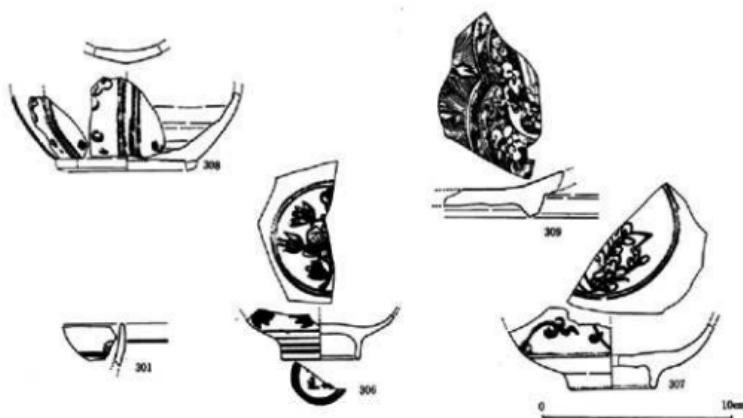


図51 3層出土遺物(1) (1 : 3)

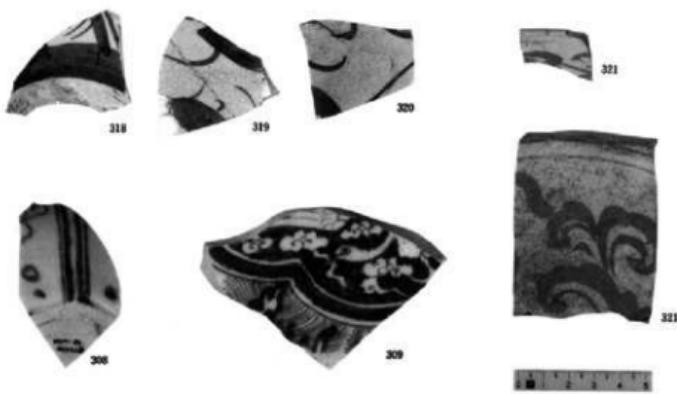


図52. 元様式青花・鉄絵

い高台を持つ。219は釉は緑がかった黄灰～緑褐色を、胎土は暗灰色。見込と壺付に多数の砂目が残る。220は黄白～暗灰色、内面に白土を縦の綾杉状に掃いている。胎土は赤褐色～暗灰色。224～225は土師器小皿。口径6.4～7.2cm、器高1.3～1.8cm・底径4.4～6.0cmを測る。232～238は杯で、口径11.0～14.4cm、器高2.2～3.3cm、底径7.2～9.4cmを測る。229～231はこの中間に

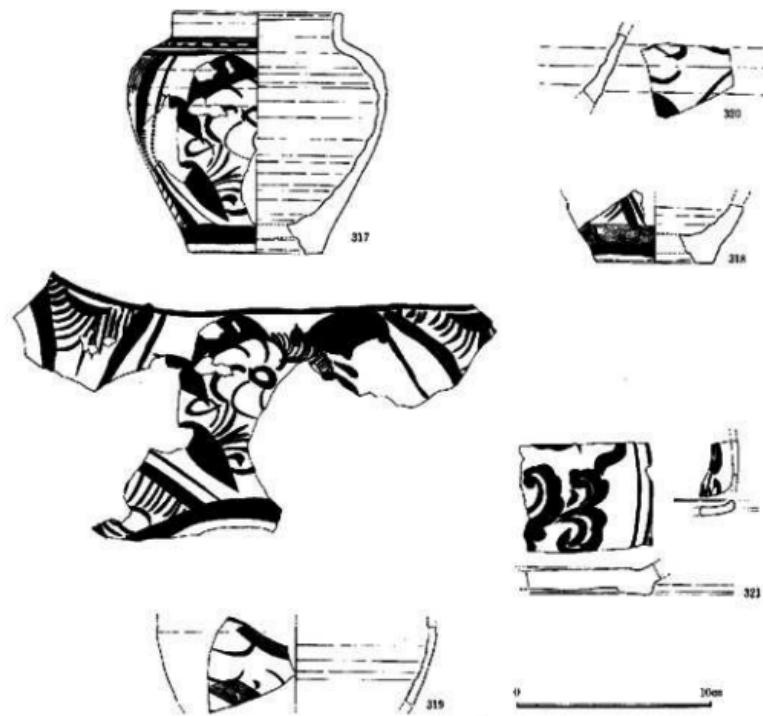


図53 3層出土遺物(2) (1 : 3)

位置する。主に16世紀代。239は陶器擂鉢。暗褐色～赤褐色を呈する。櫛目は8本。口縁外面に浅い沈線を2条施す。240は瓦質角火鉢。外面に雷文を印刻する。241(以下図50)は瓦質上鍋で内面はヨコ板ナデ、ハケ調整、外縁は指圧後粗いタテハケを施す。底部が薄く珍しい器形である。口径47.6cm。242は土師質上鍋。内面に細かなハケ調整を施す。243・244は砂岩製茶臼の受皿部で丁寧に磨かれている。244で径36cmを測る。ともに焼けている。以上15・16世紀代を中心をなし、下限は17世紀前半である。

③ 3層(図51～57) 301(以下図51)は肥前系染付碗。内面に唐草文を施す。16世紀末～17世紀初頭。306・307は明青花。306は見込と外面に牡丹文、高台内に「人明年造」を描く。307は見込に草花文、外面に唐草文を描く。全面施釉し、費付部はかき取る。ともに16世紀代。308は元様式の玉壺春型青花八角瓶である。釉は淡明青灰色。内面露胎、明青色の須でじんだ

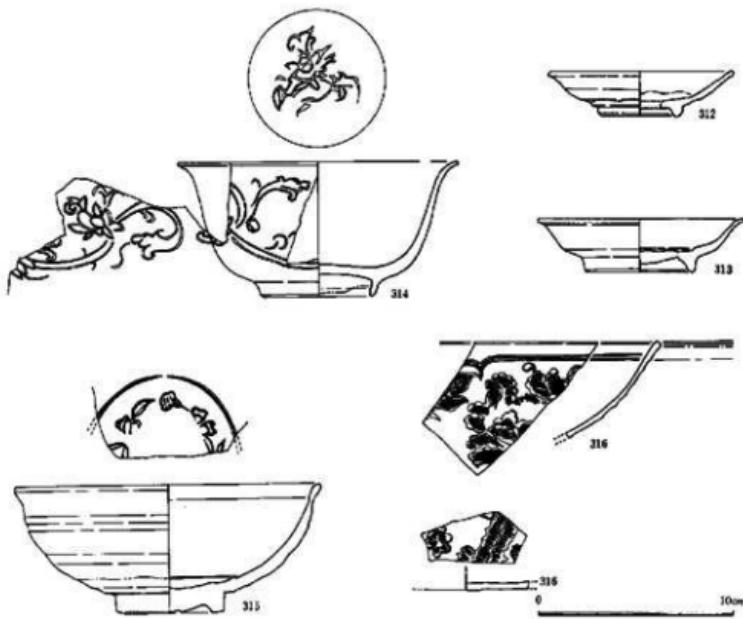


図54 3層出土遺物(3)(1:3)

感じのラマ式蓮弁を描く。底径7.6cmを測る。309も同様に元様式の青花で大盤である。釉は淡い明青灰色。内面に雲龍文と波文を描く。具須は濃藍色で粒子が粗く、粒状の濃淡で全体にボケた感じである。高台疊付は斜に削られ、高台内まで露胎である。317～321(図52、53)は元様式の白地鉄絵である。317は花卉文壺(巻頭図版2・下)でZ-3グリッドより出土。全周の口が残存しており完形に復元できる。淡黄灰色の粗い胎上に白化粧した後、頸部に鉄絵具で5条の、底部附近に太い1条の圓線を引き2・3本間に列点文を施す。胴部には1対の格狭間の窓の中に大顎に花卉文を描く。釉は薄く黄味がかった淡乳灰色で全面施釉、細かな貫入がある。疊付は焼き付いた様で釉がはがれ落ちている。口径8.9、胴径13.6、底径7.0、器高12.6cmを測る磁州窯産であろう。318～320も同種の壺の小片。321は「つば皿」と思われる口縁と見込み唐草文を描く。胎土は暗灰色。320・321は火災等による熱変成のため釉が蒸発している。312・313～315(以下図54)は白磁。313は端反りの高台付皿で釉は見込内を輪状にかき取り、疊付～高台内は露胎である。口径10.8cm。312も高台付皿で内外とも胴上半のみ施釉される。口径9.6cm。314・315は碗。314は端反り・饅頭心型の碗で見込に花文を印刻し、胴外面に1対の蓮

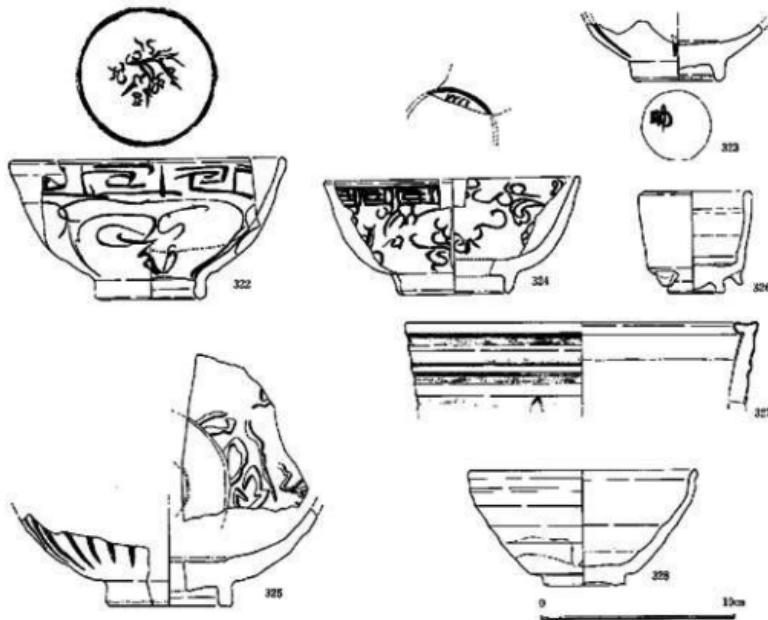


図55 3層出土遺物(4) (1 : 3)

草唐草文を線刻する。釉はやや青味がかった灰白色で高台内側まで施釉され、疊付はかき取っている。胎土は灰白色。口径14.7cm、器高7.1cm。315は口縁が小さく外反し、見込の圓線内に輪状に草花文を印花する。釉は淡灰色で外面腰まで施釉。胎土は灰色。口径16.0cm器高6.8cm、316「ロハゲ」の青白磁大皿。内面に型打ちによる草花文を浮文で施し、全面に淡青灰色の釉を施し、口唇と口縁外面の釉をかき取る。器壁が薄く胎上は白色。口径約28cm。322～327は青磁（以下図55）322・324は全面施釉後高台内を輪状にかき取る龍泉窯系碗V類。見込に印花し、口縁外面に雷文帯を線刻。322は外面に4弁のラマ式蓮弁を、323は内外面に便化した唐草文を線刻する。323・325は高台脇～高台内途中まで施釉するもので同じくV類。323は見込に印花・外面に蓮弁を線刻し高台内に「助」の墨書が有る。325は内面に印花を浮文で施した後、釉を輪状にかき取る。外面に菊弁を彫る。326・327は香炉。内面下半は露胎、326は口径6.4cmで3足が付く。327は19.8cmを測る。328は天日碗。釉は茶褐色で外面胴下半まで施釉。胎土は暗灰色。329～334は高麗～李朝の象嵌・粉青沙器（図56）。239は象嵌青磁高台付皿で、見込に2条の匯線と外周にスタンプによる如意頭文、さらに草花文を白上と黒土で表す。腰部には手持ちヘラに

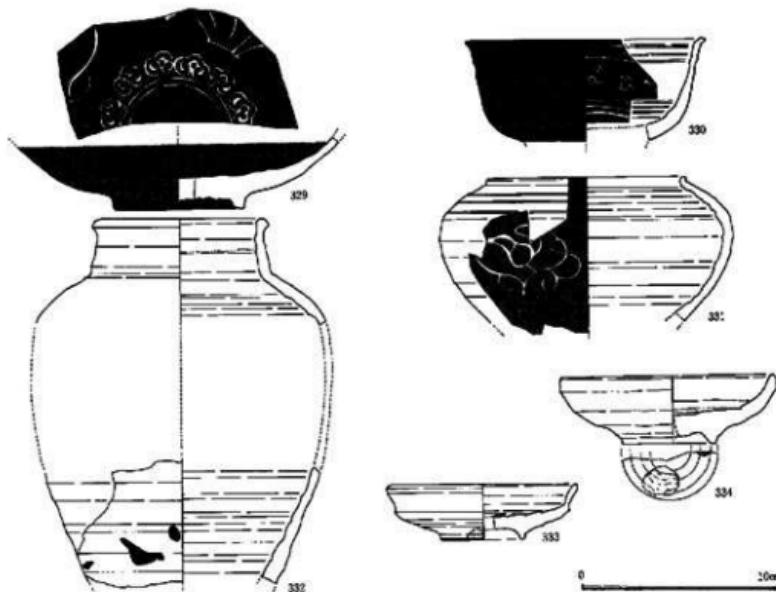


図56 3層出土遺物(5) (1 : 3)

より削りがなされ、高台内は丸ノミ状工具で手持ち削りがなされる。脛付は砂敷き。330は端反りの象嵌小碗で内面に3条の圓線2段とその間にスタンプによる龜甲文を白土で埋める。331は短頸壺で外面に不明瞭な3条の圓線と花文を白土で埋める。334は削り出しの高台付皿で緑灰色の全面施釉。胎土は暗褐色。高台内に胎土目が残る。332・333は白化鉱土掛けの白磁。333は高台付小皿で半満した乳灰色。見込と高台内に砂目痕が残る。332は玉縁様の口縁をなす梅瓶。白土は口縁内面から外全面に掛けられる。淡乳灰色を呈した細かな賞入が入る。胎土は暗灰～黄灰色。下部に飛青磁様の鉄斑が有る。前原町中川屋敷地区木棺墓（註）出土のものと類似する。335は（以下図57）李朝粉青沙器短頸壺で口縁が内折になっている。内外面に暗緑褐色の不透明釉を施釉。胎土は緻密で暗褐色。336は陶器A群の壺で口縁に受け口が付く。暗茶褐色の不透明釉が口縁内面～外面に施される。胎土は黄味がかった灰色。337～358は土師小皿で口径6.6～8.6cm器高1.2～1.7cm底径4.4～6.8cmに集中する。338～340は口径4.4～6.2cm器高2.1～2.3cmと委小化が一段と進んでおり特異である。359～364は壺。口径11.2～14.0cm器高2.4～3.5cmに集中する。365は脚付坏。皿・壺とも大部分が16世紀代である。以上14～16世紀代を中心とする。

（註） 福岡県教育委員会1982『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第63集

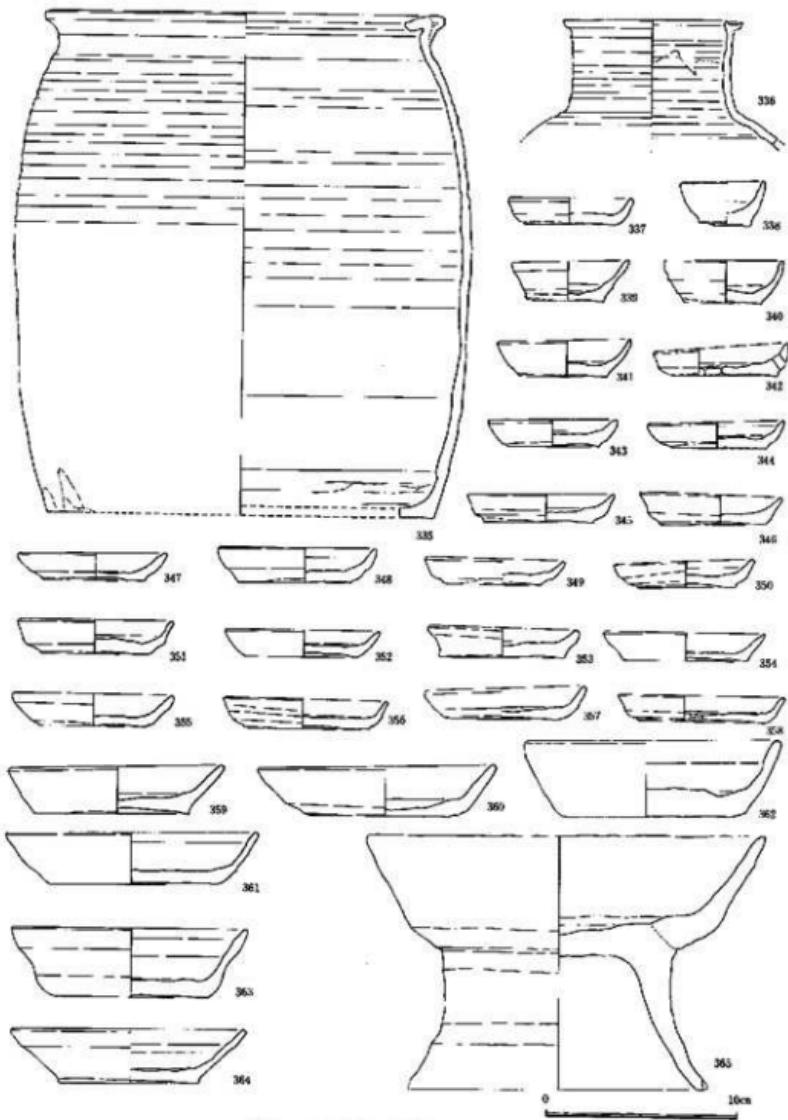


図57 3層出土遺物 (6) (1 : 3)

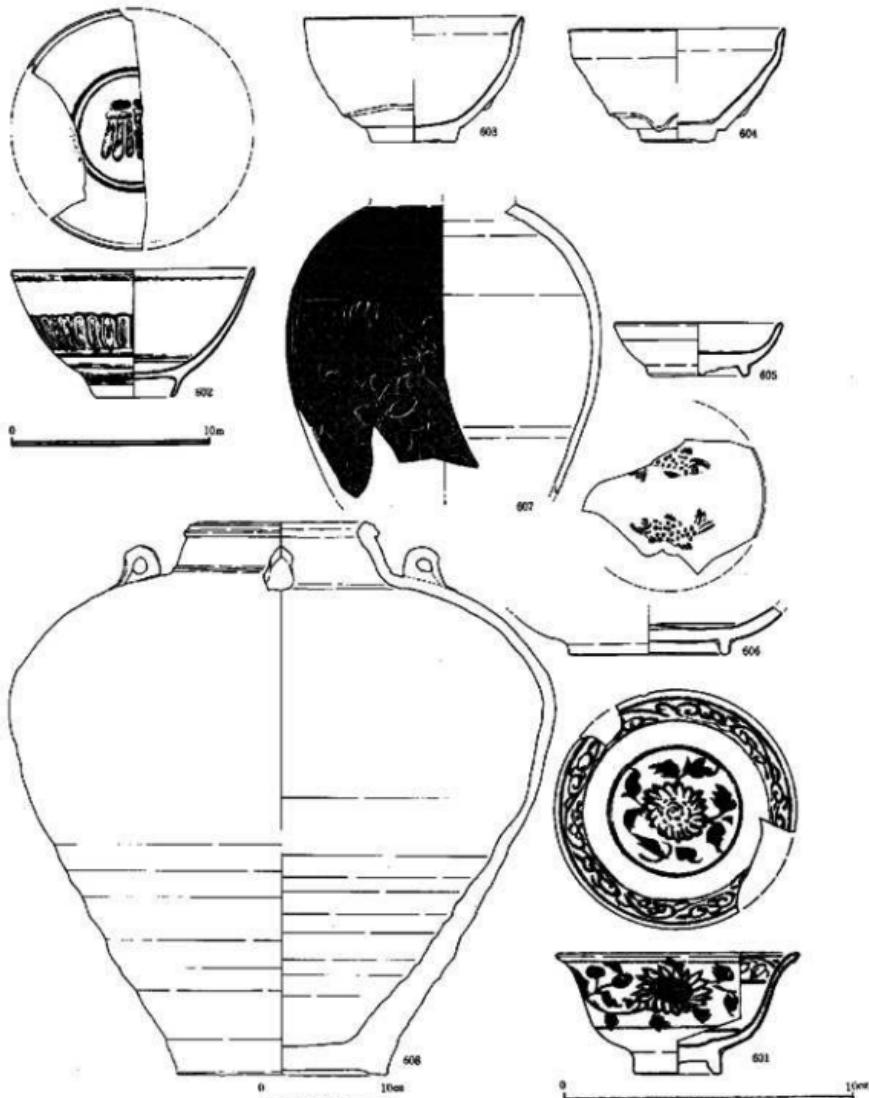


図58 6層出土遺物(1) (1:3, 601は1:2, 608は1:4.5)

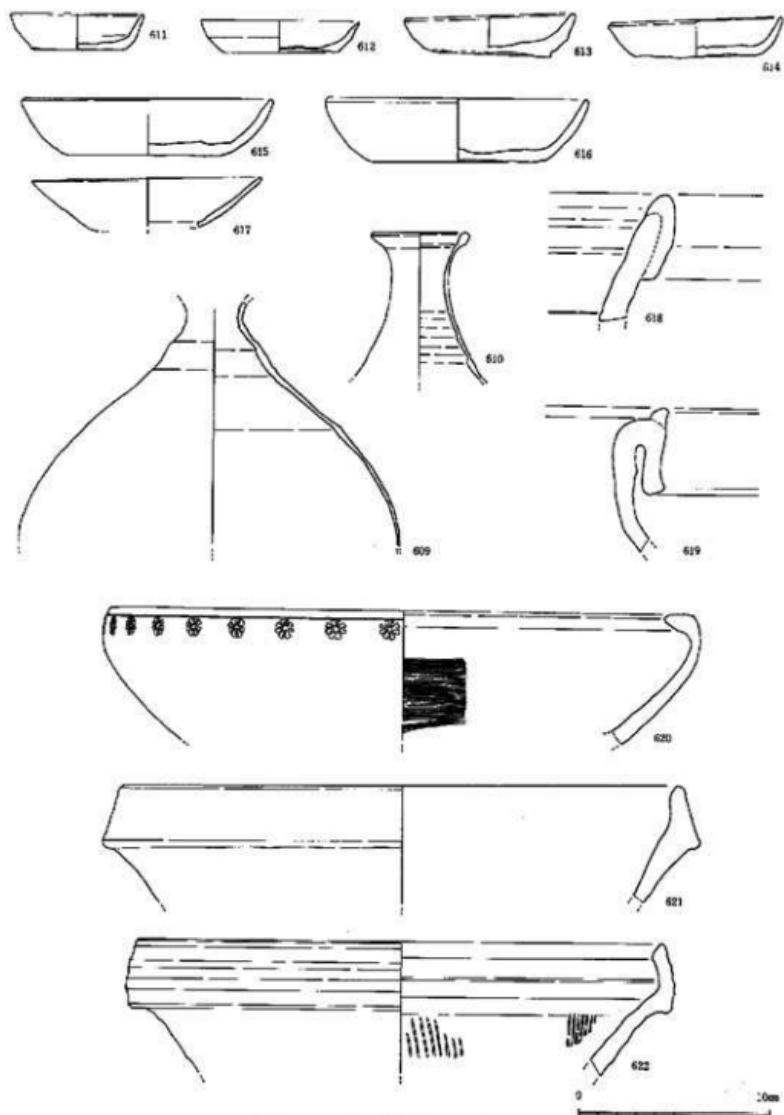


図59 6層出土遺物 (2) (1 : 3)

④6層(図58・59)601(巻頭図版2上)は元様式青花小碗である。外面の圓線間に一对の菊枝文を配し、内面の口縁下の圓線間に蔓唐草文、見込に菊花文を描く。全面にやや青味がかった灰白色釉が施され、高台墨付部のみかき取られる。高台内側に2ヶ所砂の焼きつきが見られる。口縁の一部を欠く完形品で口径8.3cm、高4.3cm、底径3.0cmを測る。602は蓮子型の明青花碗。見込に「福」の字、外面の4条の圓線上に細かな蓮弁を描く。全面施釉され墨付のみかき取る。603・604ともに瀬戸天目である。内面～外面上半にかけて茶褐色(603)と黒褐色(604)の不透明釉を掛けた。胎土は砂っぽく淡灰色を呈する。高台内の削りは浅い。605・606は青磁高台付皿、605は高台内側まで施釉する。淡青緑色、606は見込に双魚文を貼付し淡青灰色釉をかけ墨付のみふき取る。「つば皿」であろう。607は李朝象嵌青磁梅瓶。調部に白土と黒土で蓮花文を描く。胴径16.5cm。608は準A群褐釉4耳壺。全面施釉され底部に8ヶ所前後の白土の胎土目を残す。609・610は綠褐不透明釉を全面施釉する徳利型の小口瓶で609は暗褐色、610は黒褐色の緻密な胎土である。335と同種で底部もこれと同形と思われ、他に内面に印痕を残すもの、外底に数個の貝殻の目痕を残すものがある。609は胴径19.8cm、610は口径5.2cm、底径は14～15cmであろう。611～617は土師器坏・皿で全て糸切り。618は備前Ⅲ期の大甕、619は常滑Ⅳ期の大甕である。620は瓦質火舎。621は須恵質の捏鉢。622は備前Ⅴ期の捏鉢である。他に白磁碗VI-2類、6層下面より白磁碗I-1類の小片を検出している。以上、15・16世紀代を中心12世紀～13世紀前半以降の時期を示す。

⑤ 7層 7層砂中の海面下1.5～2mの地点で土師器壺の焚口の小片を採集している。古墳時代後期～平安時代のいずれかの時期に属する。

⑥混入及び擾乱層(図60) 各層より、四周の擾乱と上面で見落した遺構からの混入と思われる江戸前期～後期の資料を若干検出しているので擾乱層の遺物と合わせ報告する。101は京焼系の八角皿で17世紀後半。205・206・302は伊万里染付。それぞれ18世紀前半・19世紀初～幕末・18世紀前半を示す。209・311は肥前系白磁皿。209は紅皿で1690～1780年代、311は型打ちの輪花皿で17世紀後半～18世紀。310は肥前系の二彩鉢で17世紀後半を示す。801は福建あたりの明青花梅瓶。白土掛け後、外面に2対の雲鶴文を描く。全面に黄朱がかった淡灰色の釉を厚く施す。水裂有り。墨付は砂敷がなされる。16世紀後半～17世紀前半。802は松府系の白磁碗。内面の文様は不明。青朱がかった灰白色釉を高台脇まで施す。803は清五彩皿。外面に赤絵を内面に黄・桃・白色で草花文を上絵付する。口径8.9cm。804は瀬戸おろし皿。内外ともに上半のみ淡オリーブ釉を施す。805は石膏型によるキューピー形の博多人形。5個体分採集した。頭・胴・両手の4つの部品からなり、全長13.8cm。淡桃色の彩色がなされ、瞳は黒く塗られる。頭部付根部分に「」の刻印があり、「Fukuoka City Japan」の略と思われる。伝統工芸士の、中の子富貴子氏より、父の、中の子六助氏(生1893～没1967年)が大正14・15年頃アメリカへ輸出向けに大量に作製したもので、梱包の不備から横浜から返送され日々を見なかったものとの証言を得た。明治37年(1904)頃から博多人形の輸出が始まっており、その具体資料として貴重である。

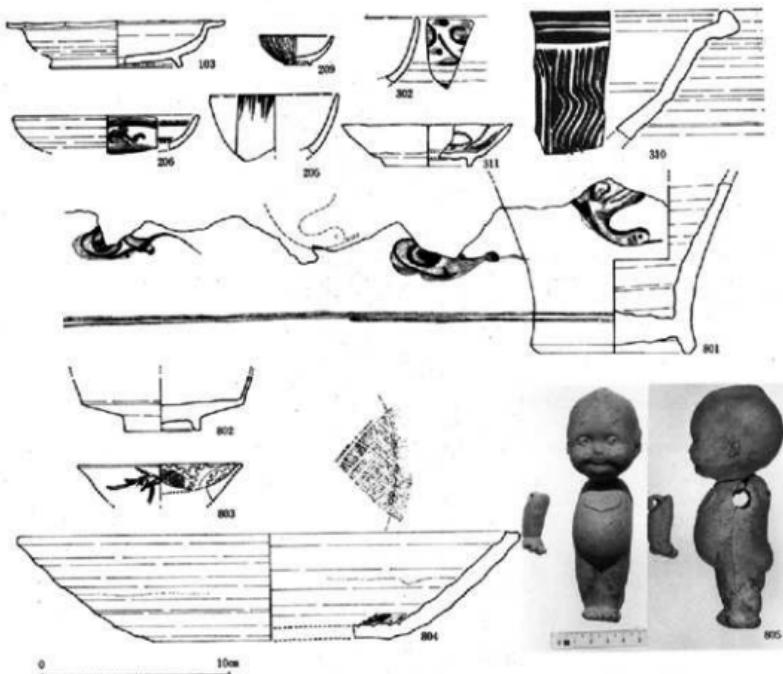
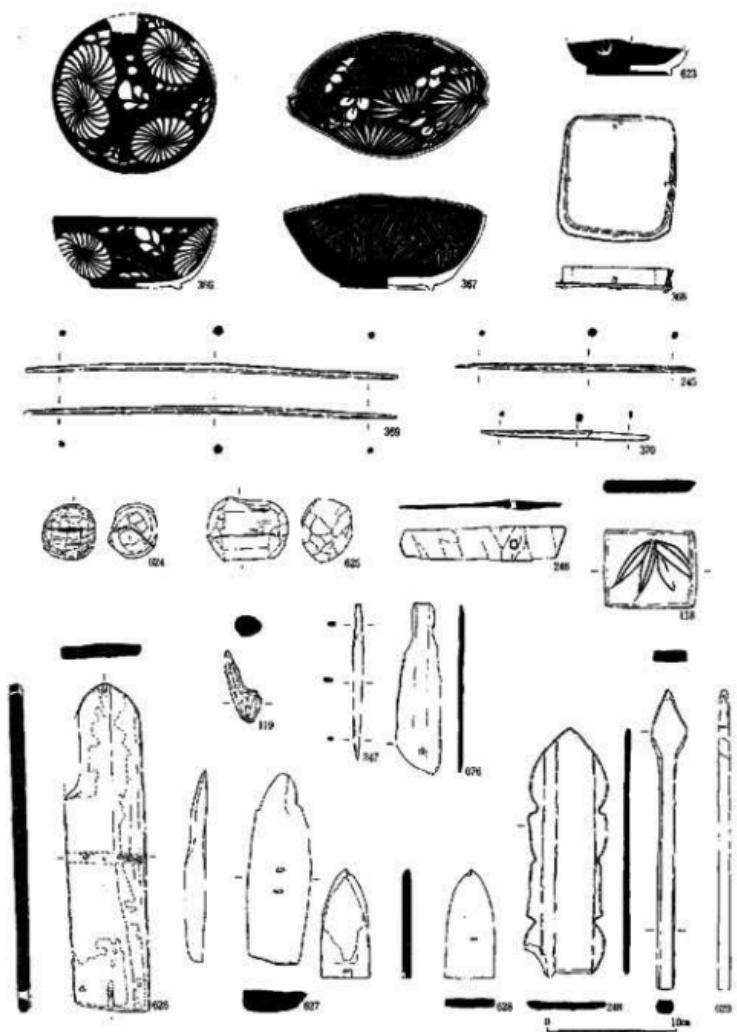


図60 混入及び攪乱層出土遺物 (1 : 3)

(2) 木器 (図61・62) 366・367・623は漆器椀。黒漆上に朱漆で文様を描く。366(巻頭図版3上)は内外面に22~25弁の菊枝文を、367(巻頭図版3下)は左外面と右内面に鋸齒文、反対側に草花文を描き、斜上の視点で反転させると全く別個の文様が展開する様、工夫されている。368は折敷。369・245・370は箸状木製品。極めて多量で、370の様な串と思われるものも含まれる。624・625は棹杖の球。246は征目板のとんば。118は柾葉状の線刻のある小板。119は鉤状の木製品、用途不明。247・076は木範。626~628は舟形木製品。627・628は帆柱穴が穿けられ、628には舵穴も設けられている。626は先端と末端に穿孔されており、イサキ漁等で擬似針を繋いで引く漁具の可能性も考えられる。248は卒塔婆の五輪部分。文字は判読できない。629は矢形木製品、遊戯具であろうか。図62は下駄と板草履(板金剛251・632)である。下駄は連齒と差齒(373・631)が有り連齒が多い。631は木楔で留める。表に所有を示す文様を多く刻む。板草履は先端が又割れのもの(251)と平担なもの(632)とが有る。



木器(1) (1 : 4)



図62 木器(2) (1 : 4)

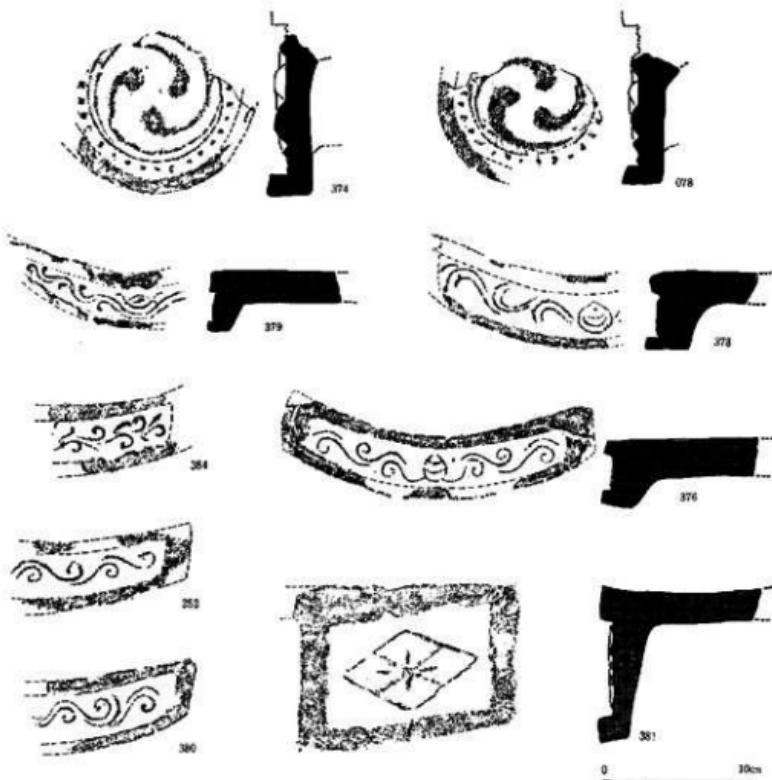


図63 軒丸・軒平丸 (1:4)

(3) 瓦 (図63) 今調査で最多の遺物で約50Lのコンテナボックス60数箱分検出している。軒丸瓦は全て三巴文を配する。374は復元径14cm、肉太の右回りの三巴文を配し、尾は半周して圓線に接する。珠文は29~30配すると思われる。078は径約13cmの扁円形。巴は圓線に接しない。珠文は28前後と思われる。軒平丸は全て宝珠形の中心飾の左右に均正唐草文を配する。379は5転する唐草文を配し、2転目は中心筋から派生。以下は単独で蔓を成さない。378は3転する一重線で表わされ先端の巻き込みもない。384は7転するようでそれぞれ子葉を持つ。376は3転し3転目のみ2重で巻き込みは大きい。幅21cm厚4.3cmを測る。252は4転する。380は3転して2転・3転目が2重になる。381は「四ッ日葵」を配する家紋瓦で、幅14.8cm厚10.8cmを測る。武田・大内氏系で用いられるもので大内氏の支族か大内の「花菱」の略化とも考えられる。

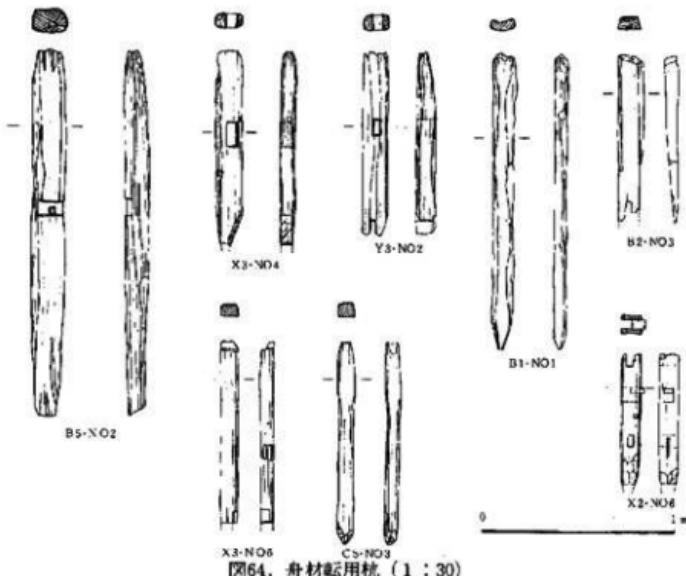


図64. 舟材転用杭 (1 : 30)

(4) 船材 (図64・65) 市内西ノ浦在住の船大工頭梁松田又一氏に部位(図67参照)の鑑定を御願いした。図64は杭に転用された船材である。B 5 - 2 ・ B 1 - 1 ・ B 2 - 3 ・ C 5 - 3 は船梁と船体の中棚・舷とを支える「根太」である。B 5 - 2 は長190cm幅17cm厚12cmを測る。中央部に凹面で $9.0 \times 13.2 \times 3.6$ cmのホゾを切り、更に $5.3 \times 3.0 \times 2.7$ cmのホゾ穴を穿ける。B 1 - 1 は $154 \times 14 \times 5$ cmを測る。裏を凹面状に1.5cm程抉る。B 2 - 3 は $87 \times 14 \times 7$ cm。横断面台形を呈す。C 5 - 3 は $104 \times 9 \times 7$ cm。X 2 - 6 は帆柱先端に取り付けられた、帆布巻上げ用の滑車の台木である「蟬」と考えられる。 $63 \times 11 \times 10$ cmを測る。正面に2ヶ所・側面に1ヶ所貫通するホゾ穴を設ける。最上部の半欠した部分に滑車、以下2穴は帆柱に固定するための門を通したものと思われる。X 3 - 4 ・ Y 3 - 2 ・ X 3 - 6 は波除けの「壠立」と考えられるが他の建築部材の可能性もある。図65は船板で、X列横板2は「根棚(加敷)」と思われ、長さ4.2m以上幅36cm厚6.3cmを測る。上部に中棚に留める通り釘の穴が23~30cm間隔で、側舷と繋ぐ縫釘の穴が48~50cm間隔で内外から交互に穿たれている。C列横板2は「上棚」と思われ、長さ5.7m幅54cm厚7cmを測る。「水押」の接合部が残っており、右舷であることがわかる。上下に除棚と中棚を留める釘穴が10~35cm間隔で穿たれる。下側に2ヶ所 9.5×7 cmの下船梁のホゾ穴を穿つ。板内法との角度は 132° を測る。間隔は194cm。上棚・加敷とも内面に長さ8~12cm幅1.5~

2 cmの平盤でヒビ割の補修がなされ
ており長期間の使用を伺わせる。解
体時に釘とともに全て抉り取られて
いる。

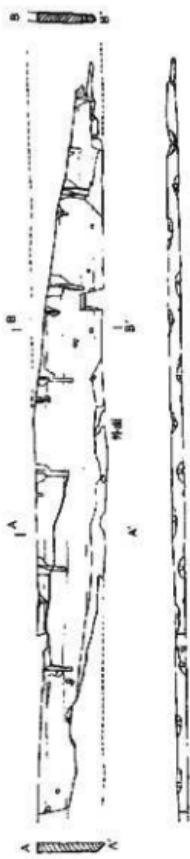


図65. X列横板No.2 (1:30)

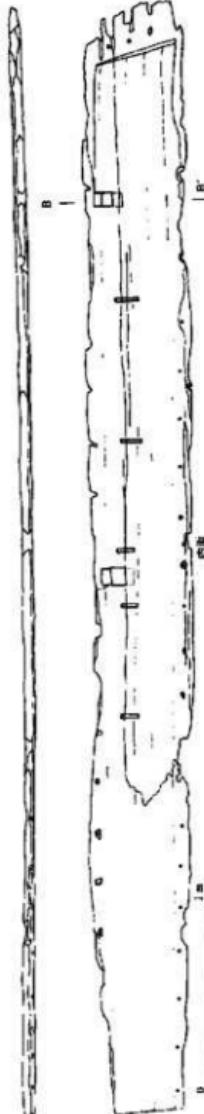
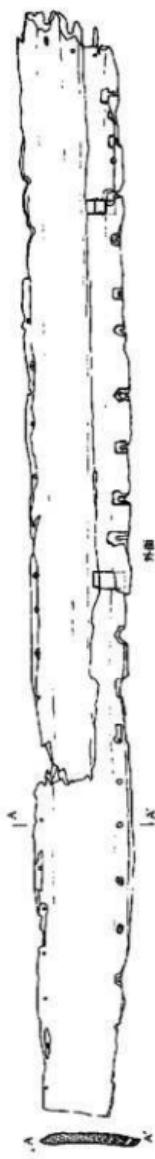


図66. B列横板No.2 (1:30)

III. 調査区出土の船材及び杭打船について聞書

市内西ノ浦在住 大隅伝流船大工 頭梁 松田 又一氏
埋蔵文化財課技師 常松 幹雄

昭和61年12月 午後2時

- 常松 今日は、博多29次調査で出土した船材を鑑定して、材質や船のどういった場所に使われていたか、またその当時の値段などをお聞きしたいと思います。
- 松田 江戸時代の値段は船一石一両くらいだと聞いています。
- 常松 幕末になつたらインフレになってちょっと相場が上つたらしかですがね。
- 常松 船材が埋められたのは、せいぜい下がって江戸時代の初めなんです。
- 松田 あの船材は、中をズーッと手斧で削ってあったでしょうが。江戸時代だったら木挽さんの鋸で削って板にしとるでしょうから、相当、古い時期だと思いますがね。
- 常松 なるほど！
- 松田 福岡城の大手門の柱も手斧打ちをしてあったでしょうか。
- 常松 重要文化財の福岡城ですね。
- 木挽で削っておいてその上を手斧で削りとったりしないのですか。
- 松田 板が厚ければしますけどね。だいたい木挽さんがやってあれば、そのままカンナをかけますね。
- しかし、船材は内側を手斧打ちしてあったのは、うすくして曲げやすいようにしたのでしょうか。
- 常松 板材がいくつか分かれていますが、これらは、どの部分になるのでしょうか。
- 松田 一枚は、船首部分の上檣板。（図67）
- 通り釘を刺した跡がありますが、釘跡の方向から船首に近い部分と分かります。

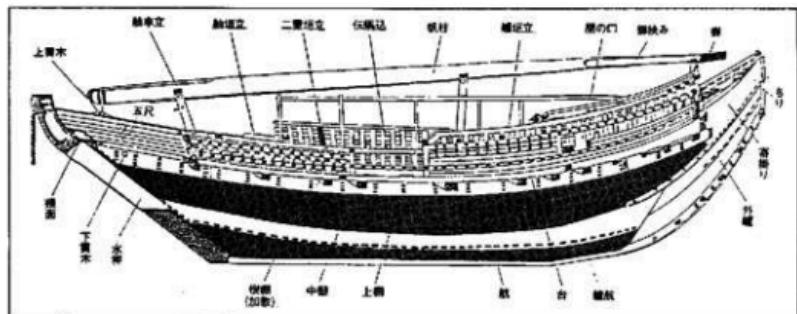


図67 和船部分名称（アミカケは出土部分）

常松 他に、加敷ではないかという板材もありましたね。

- 松田 加数の下の根板ではないかと思います。
- 常松 寝板って何ですか？
- 松田 これは、一番下の板。カワラに付く部分のことです。
- 根板というのは、船底がカワラといいましょうが、その次の板のことです。
- 最近では、根板なしにして、根板と加数と一緒にして加数板と言います。
- 常松 上棚とは一番上の外板のことですね。
- 松田 そうです。
- 常松 中棚が加数ですね。
- 松田 そうですたい。
- 常松 根板は？
- 松田 一番下の板。カワラの一番下に付ける板で、現在は使ってないですね。
- 常松 加数が中棚と寝板に分かれる訳ですね。
- 松田 そうそう。下棚のことも根板と言って、中棚のことを加数と言います。
- 常松 根板も加数ではあるんですね。
- 松田 そうですねえ。加数の一部です。
- 常松 調査現場から出てきた、大きな船材は、一つが棚で、もう一つが加数。そして、それも寝板である。という事ですね。
- 他に、杭が多数出ていますが、その中で注意すべき船材がありますか。
- 松田 そうですねえ。蟬と思われるものがあります。
- 蟬とは、帆柱の一番最上端に付くものです。これは、滑車で帆を上げ下げする為のものです。
- 蟬には櫛の木が多いようです。
- 常松 同一の船材とするとあの船は、帆柱をもった千石船ですか？
- 松田 そうですね。五、六百石積みぐらいの弁才船じゃなかでしょうね。
- 木船としては大きい方ですね。弁才船とは、遠洋航海に弱かった。鎖国政策で外洋向けの船は、幕府が許可しなかったらしいですね。
- トモは、舵を差す所です。昔の弁才船はトモの手前で離いでたから、トモがものすごく弱い。
- 常松 弁才船？
- 松田 我々も作った事がないし、模型しか見たことがない。
- 日本中に、生きとう人で実際見たことも使ったこともないやろうから。
- 常松 そうですね。
- 松田 普通千石船と呼んでいますね。それで、二百五十石積みとか五百石積みとかありますとやけん。この部分ですね。出てきた船材は。（図を指す）
- これやなかろうか…これが外板ですね。ここで板を縫いどうのが分かるでしょうね。
- 常松 江戸幕府が出来る以前と、それ以後とでは船の大きさは、若干変わってくるんでしょうね。
- 松田 戦国から江戸になってでしょうね。
- これはあなた、船の作り方に大きさの割合があったわけですたい。長さ×幅×深さ

を船の重要寸法といいます。（『大隅伝流』家伝書をさす）

ここに肩と書いてあるのは幅のことですたい。

常 松 今のうちに作っておくといいかもしれませんね。

船の博物館のようなを建てて。

松 田 そうくさ。市の博物館に4等位のを作つておいときやあねー。

金毘羅さんの収蔵庫とか海事歴史民俗資料館とかあるでしょうが。福岡やら博多湾
がね…。海外貿易があったのに、全然ないでしょうが。

常 松 ところで船材には、どんな木材を使っていたんですか。

松 田 だいたい赤松と思います。



図68 木挽鎌

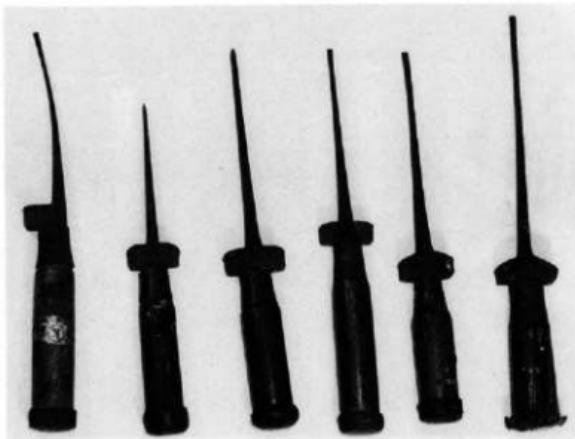


図69 各種釘差しノミ

赤松が杉より若干、強度があるくらいですね。それに樹脂があるからね。
そして木挽鋸（図68）で板を、ゴシゴシと削っておったのでしょう。

- 常 松 これ、一人でやるんですか。
- 松 田 そうですよ。そして幅の広いのはね、差し鋸といって、片っぽをこちらからこうやって、鋸二本で両方から互いにやります。
- 船釘を打ち込むには釘差しノミ（図69）を使います。棚から加敷に釘を刺しとったでしょうが。
- 常 松 確かにありました。
- 松 田 釘差しノミを使うんですよ。
- これは、家大工さんは持たないわけですね。
- 船釘は一本一本手作りです。この釘はぶ厚い角釘ですけん打ち込みよったら板がわれてしまつて出ちらかすもんね。釘差しノミを使わなければ、絶対に船釘は打てんです。
- 常 松 ノミで一応、穴をあけるわけですね。
- 松 田 結局、板と板を繋ぎ合わせる訳ですけん、前穴というて、両方の板に穴を通すわけ。全部、釘の長さじゃないですよ。まあ、ちょっと二分の一くらいはがすわけ。釘の太さによって、この釘差しノミも変わってくる。
- 常 松 船板を繋ぎ合わせないといけないから、釘差しノミでそこに穴を開けておいて釘を入りやすくするんですね。
- 松 田 歴史資料館に色々な船釘をやりました。船釘の種類には通り釘、縫い釘、貝打釘な



図70 各種船釘

上段・下段左7本…縫い釘
下段右5本…通り釘

どがあります。

- 常 松 この前、いただきましたね。
- 松 田 版と板とをハギ合わせるときの釘が縫い釘（図70）。
- 板を横から打ちつける釘が通り釘や貝打ち釘です。
- 常 松 船全体が、出土すればまだ話としては考え方やすいんですけど。
- 松 田 本当はね。しかし、精巧にできていますよ、瀬戸内資料館、神戸商船大学なんかにおいてある模型は。
- 常 松 博多湾にも、一般くらい浮かべとってもいいんじゃないですかね。
- 松 田 そうですね。それだけの奇特性人はいないだろう。
- 常 松 話はちがいますけど。江戸時代、大蔵永常という人が編集した「農具便利論」のなかに工楽松エ門という人の実用新案が紹介されています。そのなかで、杭打ち船と杭抜き船という船の絵があります。（図71、図72）杭打ち船とは、海の上で作業する作業船です。あまり大きな船じゃないようですが。つまり、船の揺れを利用してですね、「ドーン」と杭を打ちつけるのと、その逆にそれを抜くというものです。

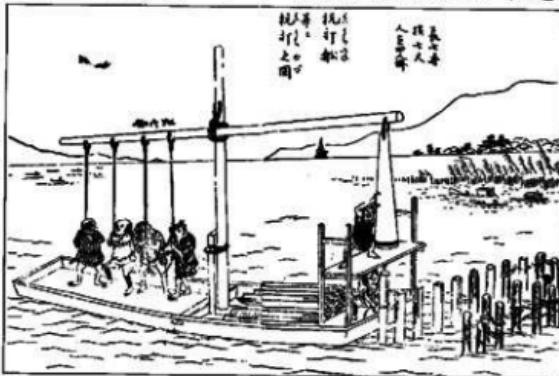


図71
杭打ち船
大蔵永常
「農具便利論」
下巻より

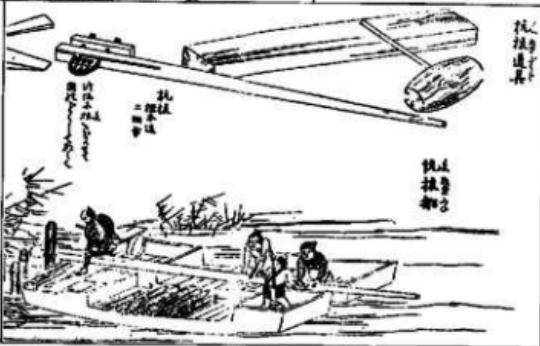


図72
杭抜船
大蔵永常
「農具便利論」
下巻より

抜いた所の杭は、ヘドロのなかにそうですね~。50~60cm入りこんでいます。
もしかしたら、船材を再加工して…。

松田 あれを使っているのは、結局、船材の根太があんなとでしょう。前をとがらしてですね、使ってるんですが。おそらく当時もヘドロですからね。だから、大きなカケヤを持って来て振り回して打つわけにはいかんでしょう。

足場も悪いし、ましてや身長が2m以上ないと打てませんからね。だから、あそこで船材を止めるのに使ったんでしょう。

常松 満潮のときに船をだして打ったんじゃないかと。

杭打ち船を使ったかというのは別として、船の上から打ったんじゃないかと。

松田 モッソウ船かもしだれんね。船と船をつないで、そしたら安定性があるでしょうが。
常松 だから、杭打ち船のそういう動きを利用して打ち付けたのかなあ。と感じがするんですね。印象として。

松田 結局、船の横でやるはずですね。

ローリングを利用して、打ち込んだんでしょうね。

常松 杭抜き船も同じ要領です。その当時の作業を考えると、その状況を思い浮かべることができます。

松田 だいたい、昔の人の方が勉強して賢い。

杭打ち船ねえ。なんか親父から聞いたような気がするけどねー。

日露戦争のときに、その杭打ちを使ったとか、使わなかったとか。

はたして、そう言いよったかは良くわからんけど。

なんか、杭作りをさせられたとか…。そして、杭打ち船のことを“なんとかかんとか”言いよったような気がしますがね。はっきりした事は言えません。

常松 繩を作るようなときに必要だったかもしませんね。

松田 深い所はね。それから船をモッソウに組んでね、一艘じゃ安定性がないからね。

常松 あそこでの遺跡も色々とおもしろいんじゃないかなと思います。

博多大溝の曲がりの部分かも知れないなー、と思っています。

松田 どうして分かったのですか。

常松 掘ってみてはじめて分かったんです。

松田 袖の浜でしょ。袖の浜の推定位置というか、元々の地形は、千年たっても掘るがしがたいですけんね。あの辺は、海じゃったんでしょうからね。

常松 息ノ浜といって、奈良屋とか古門戸町とかに一つ等高線がはいるんですよ。

それと、冷泉とか店屋町とか、あの辺にもう一つ等高線がはいるんです。

だから、調査区付近が少しへこんでいる訳です。

松田 息ノ浜というところは今もあるでしょ。

常松 はい。今は息ノ浜（オキハマ）と言います。その間に、袖の港があつただろうということで、今回の調査区が、ちょうど沖ノ浜と博多の間くらいになるので…。期待していたんですけどね。

しかし、おもしろい発見であると思うんです。最後に一番下まで機械で掘ったんですけどね。

- 松田 常松 もう、出て来なかつたでしょ。出て來ましたか。
古墳時代くらいの、竈の破片がひとつでました。
それが、一番古かつたですね。もう、水がわいてくるんで掘れませんでした。
海水やつたですか。真水やつたですか。
どっちだったかなあー。ちょっと塩っぽいかもしませんね。
松田 塩氣のあるかもしれんね。



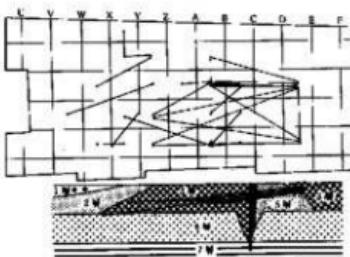
松田又一氏略歴

大正9年11月25日生
16歳で父に弟子入り
昭和15年12月より軍役、
戦後21年3月までニューギニアに
抑留
昭和60年11月25日 福岡市技能功
労者に選ばれ現在に到る。
市内西区西ノ浦在住

8.まとめ

袖の湊について 中山平次郎博士が袖の湊として提唱していた呉服町交差点付近は、地下鉄T区の調査結果により、平清盛が開削したと言われる応保2（1161）年以前の11世紀後半には既に陸化していることが指摘されている（註1）。最近では交差点の北東と南西の貫線沿いの低地に求められており、当該地はその中央部に当たっている。しかし、埋立客土下の6層からは13世紀末頃から15・16世紀代までの遺物が突出しており、12世紀代の遺物は白磁碗Ⅰ-1類が7層直上からと、他に2点検出したのみである。最下層の砂層からは土師質の甕の底の小片を得たのみで白磁碗等は1片も採集されていない。当時が現海水面と同潮位である事を前提として、砂層上面のレベルは標高0～20cm前後で大潮時に小舟が航行できる程の状況である事が確認された。附近の16次調査でも同様の結果を得ており、この砂上に泥が堆積し、泥海から干潟と化していく時期の上限も同様に13世紀末と見られている。福島金吾氏の文献の分析によると（註2）、「袖湊は、鎌倉、南北朝期の息浜津の部分を指そう。南北朝以降は、冷泉津が一般化して、息浜はそれに包摂されている存在である。ここに、港湾として使用された時代が、鎌倉～南北朝段階であり、その後は土砂の堆積作用の中で、使用されなくなったものと考え」、「港湾としては冷泉津が前面に押し出されていることが明らか」であると述べられている。天正末年（1591頃）の豊臣勝俊の『九州のみちの記』に「袖の湊とことごとしくいはれたるはいづくぞ、尋見ばやと申ければ、あるじ心ある人にて、しるべしけるに、あるじ云く、今こそ汐のさしきて水も少はれ、常は無下にいふかひなく侍ふ物をとぞ申ける、誠にもろこし舟よせつべき浦とも見えず」と有り、30～50cmの層を成す6層の状況を良く物語っている。

埋立について 埋立構造の主軸がN-46°～53°Wを取り、現街区（太閤町削）に沿った計画的なものである事・客土中の遺物の上限が若干の混入も認められるが16世紀末～17世紀前半である事・多量の火熱を受けた瓦を使用し、埋立が2度にわたって行われている状況が「石城志」の記述と符合する事等により慶長5（1600）年の小早川秀秋・慶長18（1613）年の黒田長政の埋立による可能性が高いとの結論に達した。前段の埋立の施工法は特異で干潟上に方形の島状の客土を行なった後、（1期工事）入江の奥部（北東）から開口部（南西）に向け埋立てている。客土中の遺物の接合状態（図73）もこれを裏付けており、1期工事の内外は一気に埋



められている。1期工事は以降の捨石によって土留を成す2期工事と異なり、周囲から全く隔離しており、2期工事の様に龜甲、蓆を敷いて足場を作った痕跡もなく、Ⅲでも述べているが、満潮時に船上から施工した可能性が高い。杭打ち船は大明年間（1781～1788）の発明品であるが、これに類する方法で船上から杭打ち、客土

図73 包含層内接合遺物分布模式図

がなされたと考えられる。1期・2期工事とも人名替讀と考えているが、近世の他の埋立、干拓が百間千間単位であるのに対し、単位が小さいのが気がかりである。2期工事の全長は明確にし得ないが1回の埋幅は2m~5mで、1間~3間弱の幅である。「石城志」によれば、袖の湊にかかっていた湊橋は長さ82間とも120間とも有り、これを採用すれば袖の湊の開口部は幅約150~200mを測る。これだけの幅を一気に埋めるには土や石等の調達は1~3間分が限度であったのだろうか。更なる検討を要する。

船板について 慶長5年と思われる埋立に用いられた横板は日本形構造船、中でもX列横板2は通り釘、縫い釘の穴(図75)の配列より加敷と思われ、よって瀬戸内九州に通有の弁財造りの五十糸船(荷船)である事が判った。敷(舷)・中欄・上欄からなる構造船は16世紀には成立している様であるが、根欄(加敷)を持った弁財造りの後期型は江戸時代初期に登場するものと言われており(註3-図74)今回発見された船材は廃船されるまでの耐用年数を勘算すると、この起源を数十年遡る可能性がある。登場当時のものは300石積程度と言われており、大陸伝流の勘算では全長47~48尺(14.24~14.54m)・全幅16尺4寸(4.97m)・全高5尺1寸(1.545m)を測る規模のものとなるが、部分の出土のためその判定は難しい。

元様式青花について 今回の調査では3点の元様式青花磁を検出している。1点は小窓で6層より、2点は3層より盤と玉壺春型の八角瓶を探集している。亀井明徳氏によれば(註4)1984年9月10日現在で北は東京都葛西城から南は沖縄今帰仁城の十数遺跡で出土しているが圧倒的多数を沖縄が占めている。九州では不明確な鹿児島県一乘院跡も含め、熊本県上益城郡浜の館・福岡市博多区上眞服町博多築港線第2次調査区と当調査区の4遺跡のみで、博多に集中している。琉球王朝は文中元年(1327)以降、明と朝貢関係に有り、朝貢貿易を行なっており、又南方との交易も行なっている。沖縄での元青花の多量さは以上の関係を物語るものである。時代は若干下って15世紀前半になるが、文献では宋金他の博多商人の朝鮮-琉球交易ルートでの活躍が観察されている。当調査区では元青花とともに1点の安南磁器も検出しており、勘合貿易・密貿易の他、此等朝鮮-琉球間の仲介貿易をなした博多商人の活動の証とも考えられる。

尚、松田氏・市立歴史資料館嘱託の高田茂廣氏には和船について、九州陶磁文化館資料係長大

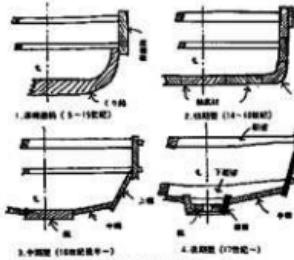


図74 日本形構造船の推移
上野喜一郎「船の世界史」上巻より

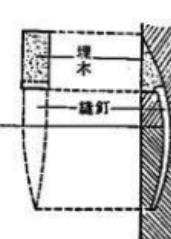


図75 縫釘を使ったはぎせ法
石井謙治「和船の変遷」「月刊文化財」No.111より

橋康二氏には陶磁器について、西日本新聞嘱託江頭光氏・博多人形商工業協会の方々には博多人形について多くの御教訓を賜った。記して感謝申し上げる次第である。
(註はP66)

付論 博多遺跡群第29次調査出土船材調査報告

九州大学 木材理学教室 長尾博文 渡辺洋徳 古賀信也

博多遺跡群第29次調査の際出土した船材10点の樹種を調べた。結果は次のとおりである。

①B 1 杭 1	イヌノキ	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc
②B 2 杭 3	イスマキ	<i>Podocarpus macrophyllus</i> D. Don
③B 5 杭 2	イヌノキ	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc
④C 5 杭 3	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc
⑤B 列横板 2	イスマキ	<i>Podocarpus macrophyllus</i> D. Don
⑥X 2 杭 6	不明	
⑦X 3 杭 4	イヌノキ	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc
⑧X 3 杭 6	カシ類	<i>Quercus</i> sp.
⑨X 列横板 2	マツ（二葉）	<i>Pinus</i> sp.
⑩Y 3 杭 2	イヌノキ	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc

以上の樹種について、その性質と解剖学的特徴を述べる。

イスマキ *Podocarpus macrophyllus* D. Don

針葉樹材で、横断面で樹脂細胞が認められ、単独または接線方向に数個連続し、年輪内に散在している。分野壁孔はヒノキ型である。

マツ（二葉） *Pinus* sp.

針葉樹材で、横断面に樹脂道が見られ、エビセリウム細胞は薄壁である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管とかなり、放射仮道管にはこの歯状肥厚が認められたが、種の同定にはいたらなかった。

イヌノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc

広葉樹散孔材で、横断面には小さい道管がほぼ均等に分布し、階段せん孔をもつ。

放射組織は異性I型である。材は比重が大きく硬い。

カシ類 *Quercus* sp.

広葉樹放射孔材で、道管は単せん孔を持つ。広放射組織と単列放射組織があり、同性であるが、種の同定にはいたらなかった。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc

広葉樹環孔材で、年輪の最初の道管が極めて大きく単せん孔であるが、小道管では時に階段せん孔が見られる。放射組織は単列同性である。

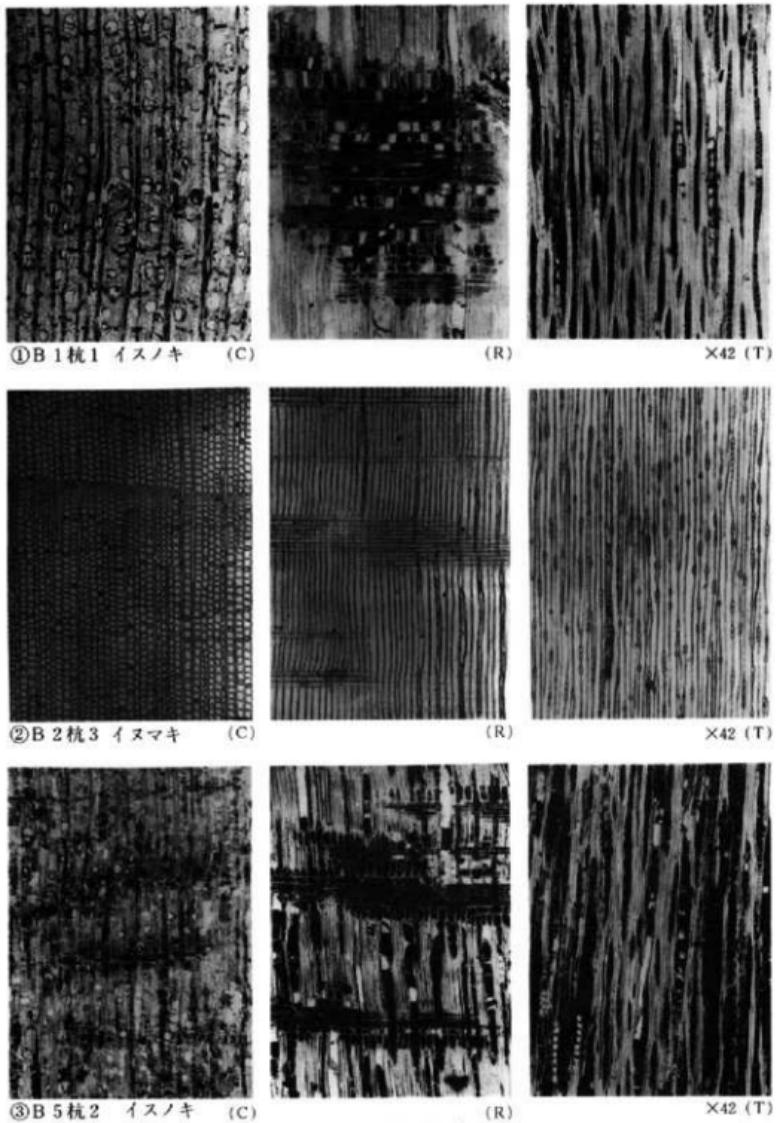


図76 船材顕微鏡写真(1)

- 62 -

C—横断面
R—放射断面
T—接線断面

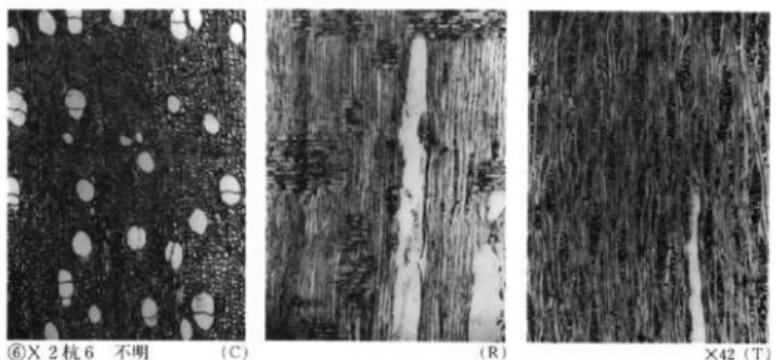
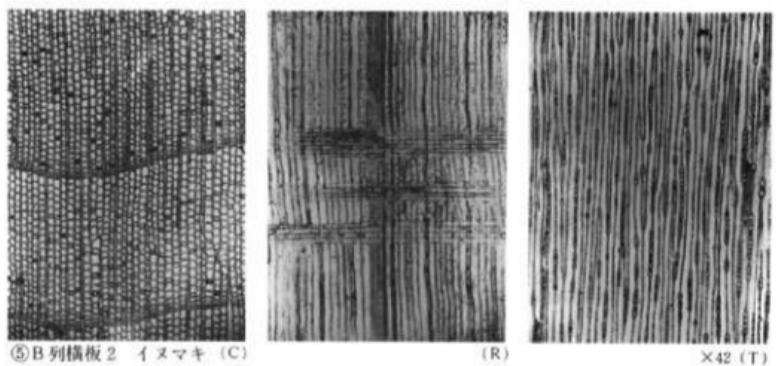
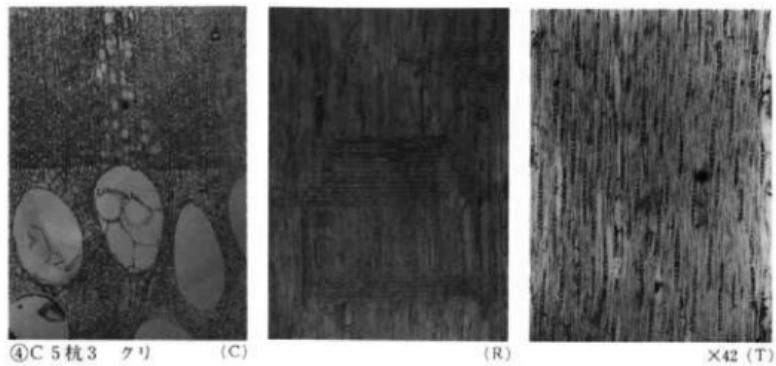


図77 船材顕微鏡写真(2)

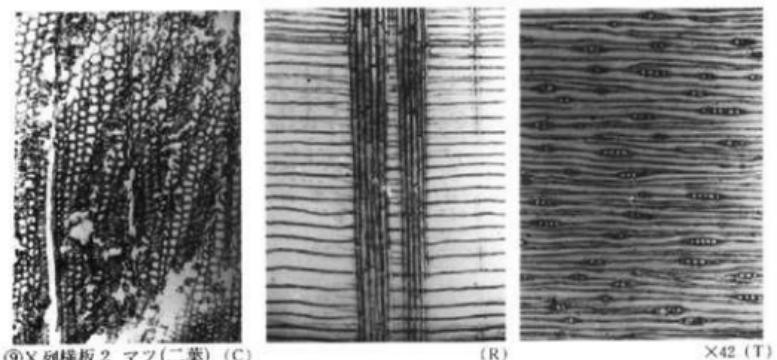
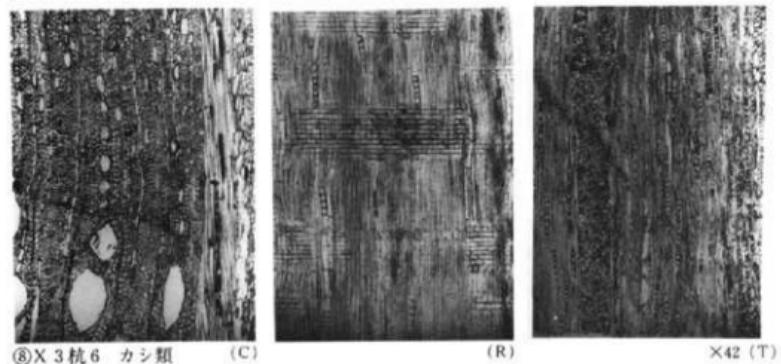
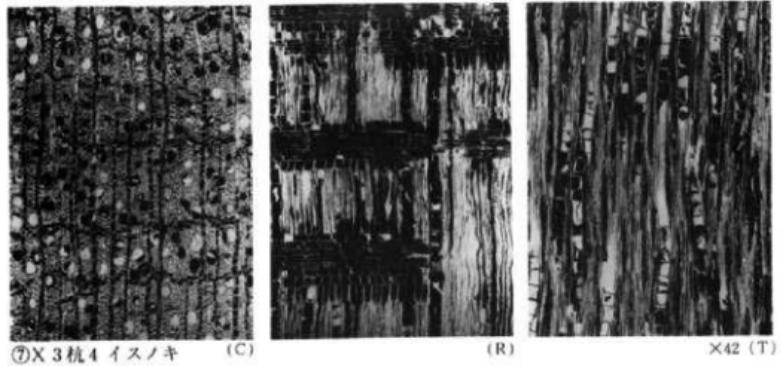
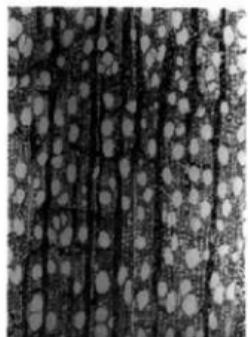


図78 船材顕微鏡写真(3)



⑩Y 3 桧 2 イスノキ (C)



(R)



×42 (T)

図79 船材顕微鏡写真(4)

- 註 1 折尾学・池崎謙二・森木朝子「中世の博多—発掘調査の成果から』『古代の博多』
九州大学出版会 1985
- 註 2 福島金治「報告－袖の湊について－」福岡市教育委員会 1978
- 註 3 石井謙治『和船の変遷』『月刊文化財』111号 文化庁 1973
上野喜一郎「船の世界史」上巻 輳社 1980
- 註 4 亀井明徳「日本出土の元様式青花白磁集成」『日本貿易陶磁史の研究』
同朋社 1986

Summary

Hakata(博多)Sites are located in the northside of Fukuoka Plain that faces Hakata Bay.
This province belongs to Hakata district of Fukuoka City, and has been known for an open gate for
foreigners from ancient time.

We designate one of the areas for rescue archaeology during the 1985 campaign "the 29th point of
Hakata Sites".

As a result of the excavation, some structures were found; 5 wells, 3 artificial composition of stones, 1
ditch and many lines of piles made of wood or bamboo.

And according to exclusion of mud, we found wooden boards protected by piles and stone walls.
Considering the strata of the site, the boards were thought to have been used for reclamation and the
stone walls were like banks of a water way. Besides it, we saw that boards were parts of Japanese ships,
and there is possibility the piles were also parts of them.

Remains of structures are Chinese, Korean and Japanese medieval ceramics; Bizen, Tokoname, Seto
ware and Japan bowls and so on. Most of all are dated from 14th century to 18th century.

Especially, a cup painted in underglaze blue and jars with floral design in underglaze iron have rarely
been excavated in Japan.

The excavation in this point continued in a short time, but contributed to the studies on the Middle
Age harbor town "Hakata", we confirm.

博多 VII

—博多遺跡群第29次調査の概要—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集

昭和62年3月31日

発 行：福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2-10-29

印 刷：福博綜合印刷株式会社
